

ふるさと発見 第6集

# 掛川の人物誌

掛川市教育委員会





## 歴史は魂のふるさと 先人は心の鑑

ふるさと掛川には、先人の努力によりすぐれた歴史があり、格調高い文化が育まれております。

これらは、私たちの現在のくらしの中に生き続けていますが、社会の変化にとまない次第に衰微していこうとしているのが現状ではないかと思えます。

この土地に培われ育まれた人々、そして歴史や文化をもう一度掘り起し見直して、次の世代へ受け継がれることを願い、目で見える郷土の歴史と文化の資料として、「ふるさと発見シリーズ」を昭和五十四年度から発行してきました。

このシリーズは

第一集 長屋門

第二集 掛川の文化財

第三集 掛川の植物

第四集 掛川の古文書

第五集 掛川の埋蔵文化財

として既に発行し、昭和五十九年度には、

第六集 掛川の人物誌

を刊行することになりました。

ふるさと掛川は東海道のまん中に位置しており、往占から東西交通の要路、要衝として、日本各地からの人々の往来があり、

文物、文化などの受容を大きくうけて発達してきました。

こうした中で、遠く奈良、平安の昔に生きた祖先をはじめ、中世、近世、現代に至るまで幾多の人材が輩出いたしました。これらの人々の業績にふれる時、偉大な多くの先人の魂は、現在に生きる私たちの心の糧となり、鑑となることを悟るものであります。

ある時代を苦斗の中に生き抜き、歴史の一頁を創りあげた人たちの努力や業績は現代への教訓、指針を示しているものであります。

本書の編さんに当たっては、掛川の発展につくされた人々や、全国的にその業績が高く評価されている先人を含め四十余名を紹介することになりました。

執筆された方々を始めご協力をいただいた関係者に深く感謝申しあげると共に、本冊子が郷土掛川のこれからの発展の手がかり、そして、生涯学習推進のため活用されることを心から願うものであります。

昭和六十年三月吉日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤 昌明

# 目次

序にかえて	掛川市教育委員会 教育長 伊藤昌明	1
国づくりの祖(現・掛川市域) 素賀因造		2
防人の歌 —— (大部黒当と生玉部定國)		3
遠江国司 —— 大江公資とその一族		4
豪族の武士化 —— 原三郎清益		5
遠江への禪宗の伝播とその確立 —— (忽仲平闇・石叡永珊・松堂高盛)		6
今川政治の基礎を築いた —— 朝比奈氏		7
徳川家康の側室お愛の方とその一族		8
豪傑武將 —— 石谷十蔵貞清		9
近世掛川の基礎をつくった —— 山内一豊		10
日坂宿問屋 —— 片岡清兵衛		11
幕府老中を三度勤めた —— 太田資始(道醇)		12
西洋医学発展の先駆者 —— 戸塚静海		13
完備流茶道の発展 —— 宗徧流茶道と小笠原氏		14
郷土の伝統工芸 葛布問屋 —— 三文字屋莊右衛門		15

用水路の発達	—— 波山得船	19
掛川藩学の父	—— 松崎操堂	20
国学の発達	—— 石川依平	21
掛川藩の豪快な庄屋達	—— (中山勘太郎・河井弥八郎重高・榛葉作平)	23
書大家	—— 成瀬大城	27
報国隊の結成	—— 山崎八峰	28
報徳精神の普及	—— (岡田佐平治・平岩佐平・岡田良一郎・岡田良平)	30
掛川茶の普及	—— 小林源四郎父子	36
水道事業の発達	—— 鈴木理一郎	37
教育界の功労者達	—— (飯塚仙太郎・鬼頭うた・井上織三郎)	39
地方産業の振興に努めた政治家	—— 松浦五兵衛	42

表紙写真

西町の奴道中

素賀国造「美志印命」可美真手命

クマシマフミコト

古事記には宇摩志麻遲命、旧事本紀には宇麻志麻治命・味間見命と記されている。神武天皇が橿原の宮で即位した時、素賀国造となつた人である。

父饒速日命が大倭の鳥見の白庭山に来て、その土豪たる長髓彦の妹である三炊屋媛（古事記には登美毘古の妹の登美夜毘咩と書かれている）を娶り、可美真手を生む。そこで父は長髓彦と共に居住する。長髓彦は、饒速日命を神人と強く信じ主君とあがめ尊敬していた。

神武帝が、東征の軍を進めて来たので、土豪の長髓彦は衆を率いてこれを孔倉衛坂に行かえ撃つたのである。神武帝はこの戦に破れて、軍勢を率いて退いた。再び、軍を建て直して道を変えて菟田に進み、魁師兄狛子等を誅して、再び長髓彦と闘つた。しかし利あらずして苦戦が続いたのである。

そうした或る日、空が曇つて氷の雨が降る中を、金色の雉が飛翔してきて、神武帝の弓阴にとまると、まぶしい光を稲妻のように放つて劣勢たる神武帝の軍隊を鼓舞したため、長髓彦の軍勢は、そのまぶしさのために闘うことができなくなつた。

そこで長髓彦は使者を送つて言うのには、先に天神の子が此の地に来ました。その名は御玉饒速日命といます。そして私の妹を娶つて児まで産みました。私たちは此の神を主君として仕えてきました。天神の子が、どうして二人おりましたか。どうしてでしょうか。あなたも天神の子だといって、私の土地を奪うことができますか。神武帝は「天神の子もたくさんいるのです。お前が主君だとしている者が、本当に天神の子であるならば、必ずその証拠があるだろう。それを見せてもらおう。」

長髓彦は、早速にその証拠となる饒速日命の天の羽々矢及び歩射を取つてしるした。帝はそれは本物であると言つた、が帝もまたし

るしとして天の羽々矢と歩射を見せたのである。長髓彦はこれを見て恐れ入つたが、相互に戦争の構えて、騎虎の勢は制止することができないまま、帰順できずにいたが、饒速日命は、もつと天神の意を知り尽したので天孫に属することを願つて、長髓彦には帰順する意志の無いことを知り、遂に長髓彦を殺して、軍勢を率いて帝に帰順したのである。神武帝は喜んで部下に加えた。これが物部氏の遠祖となり、穗積氏、采女臣などの祖となるのである。可美真手は祖先より伝来する所の十種の天瑞宝を以て帝に献じたり、帝のために尽忠の誠を示したので、天物部を率いて賊軍を討ち平げて功を挙げた。

神武元年正月、帝は即位し、可美真手はまず、天瑞宝を奉じ神盾を堅めて齊とし、又布都主神は剣を殿内に奉納して、十宝を藏して、帝のために鎮魂の祭をした。帝は大変喜び詔して殿内に宿待させた。それにより足尼と号した。足尼の号は此れより始まるのである。神武帝が殿舎に居住するや、可美真手は内物部を率いて矛盾を立てて儀衛をきびしくした。是の年の十一月に、帝や皇后のために天瑞宝を奉じて御魂を鎮し、寿祚を祈つた。これが鎮魂祭の始めである。明年二月に、詔してその忠誠を賞し、股胫の臣として、素賀国造となり子孫にこれを世襲させた。

可美真手には味饒田命、彦湯支命という二子がありそのうちの彦湯支命は別名を木開と名乗る。彦湯支命の孫の大木食命には、大総麻杵命という子がありその孫が伊香色雄命であった。彼ら一族は、久努国、佐夜部直、遠江国などの造となり、部曲の長となつて子孫が掛川周辺に広がる。事任八幡社の祭神も、後世命を尊んで祭られたと伝えられている。又、和田岡原に眠る大古墳群はこの一族の墓であろうと思われる。

饒速日命  
 可美真手  
 味饒田命  
 彦湯支命  
 大木食命  
 大総麻杵命  
 伊香色雄命  
 三炊屋媛  
 宇摩志  
 麻遲

## 防人の歌（丈部黒当・生玉部足国）

孝謙天皇の天平勝宝七年（七五五）二月六日に防人部領使（サキモリコトリツカヒ）の役人の遠江国史生坂本朝臣人上という人から、防人等の詠進歌十八首を上梓したが、その中の七首が万葉集廿巻の中に載せられている。

遠江国佐野郡（今の掛川市）から二首が記載されている。その一人が丈部（ハセツカベ）黒当（クロタ）なる人の歌として

「父母も花にもがもや草枕 旅は行くとも挿げこて行かむ」  
もう一人は、生玉部（イクタマベ）足国（タリクニ）で、

「父母がとのしりへの百世草 百世いでませわが来るまで」

この二首と共に二人の名前が残されていることは、奈良朝時代に、この掛川市に丈部（ハセツカベ）なる職業的品部（トモベ）と生玉部（イクタマベ）なる部曲があったことである。

丈部とは馳使部として安倍氏の配下に所屬していた職業的品部が、掛川市の長谷を中心にしたことが解る。

天平十年（七三八）の駿河国正税帳に「佐益郡散事、丈部塩麻呂」を載せている。

掛川市宇洞ヶ谷の横穴古墳群から発掘された遺物は、この丈部塩麻呂のものではなからうかと思われるのである。またその地名も、長谷地区に含まれるし、逆川、倉真川の合流点の下流に、丈部なる部曲が最も盛えたのである。

長谷地区（ナガヤ）はその地名から考察しても、左右に山があって南北に長い山間があることから用いられた地名である。

初馬（初間）は初めの谷間であり、倉真（倉間）丹間、萩間というようにいずれも谷間のある地をさした。しかし長谷だけその地名に谷を用いたのは、たぶん小さな地点名が大字名に変化したためであらう。

またもう一点、長谷は長谷部（ハセベ）更に丈部を表記したものであらうと思われる。

生玉部（イクタマベ）は、乳部（ミブ・ニブ）、生部（ミブ・ミブ）、壬生部（ミブ）と同じである（太田亮・姓氏家系大辞典）

即ちこの生玉部も職業部の一つで、「皇子御養育に仕え奉る人々及びその封民をいうなり」と、壬生部は各皇子によって存在しているか、多くは一時的なもので、その職を司ったあとはその名を失うとされている。しかし時には御子代部として、その皇子の御名を負うこともある。皇子の死去後も、その養育にあずかった人々や封民をもつて一つの品部を組織し、その皇子の名を負うことが、地名として残っているものである。

大化二年紀に「その詳の臣、連、伴造、国造の所有地が、昔ある天皇の置きける子代人部や、皇子等が私に所有する御名の入部、及び屯倉などが、その当時五二四口あり、屯倉が一八一所を献る」と記されている。

佐野郡にこの地名を追うに、生玉部は日根郷であり、西郷の地に屯倉を置いた所を「ミヤケ」と呼ぶ、そこに生玉部の群があると思われる。

## 遠江国司 大江公資とその一族

応徳元年（一〇八四）十二月二十日、遠江国の国司として、登場して来た人が、大江公資である。この大江公資は文章博士であった大江章人の子孫である。

「釋れて行く年とともにぞ別れぬる。道にや春はあわんとすらん。」と赴任し、遠江の国の原野に目をつけて、田地の買取を行いだした。即ち賀侶郷・山口郷・日根郷と、東遠地区を中心に、私営田の経営に打ちこんだのである。

公資の子の広経、この人は伊勢の守であり伊州と呼ばれている。この二代の力で、日根郷を小高庄として三百歩の開発を行ったのである。嘉保二年（一〇九五）正月のことであった。

大江広経（伊勢守伊州）の子、広言（公仲）が、その子の仲子（山口得丸）に残した財産処分状案によれば次のように記されている。

小高庄は親父の伊州（広経）が所有主（公資）より調度文書と一緒に伝領された庄園で、国司の免判を請う必要はない程、荒地になつてゐるのを、立券するために、公験を添えて、寛治七年（一〇九四）春、藤原兼実入道に献上した。

その約束に次のようなことが記されている。

1. 小高庄は次伊州（広経）が本主（庄園の所有者）である公資より、その他の財産と一緒に受け取つたものである。
2. この占有地は殆んど未開発の荒地である。
3. この庄園は国判（国司の免判）も官符得もない。
4. 公験（所有権公認証書）を添えて右馬頭に寄進した。
5. 小高庄を開発し必ず年貢を納めること。
6. 但し預所職は公仲とその子孫に必ず伝えること。

三十五年後の大治五年（一一三〇）には公仲の子の仲子が「大江仲子解文案」を残している。

1. 今からおよそ八百年前に東海道佐野郡山口郷に小高庄が成立した。

2. この地域は畿内から遠く離れていること。

3. 小高庄の荘域は殆んど山地で平地は僅かに山間の狭い小地域で、これを順次水田に開いていった。

4. 小高庄は自墾系の荘園として成立し、開発中に寄進系荘園に転化しようとしていた。

山口郷を中心に大江公資、広経、公仲、仲子と四代に渡って開発した小高荘も、山口郷の堀之内（宮脇）に居住していたのであろう。日根、山口郷の荒地を小高荘と呼び、山口郷に本家を持ち、日根郷を西郷と呼んだのであろうか。大江仲子は公仲の長女であり別名を山口得丸と呼んだところをみると、国領より離れ、新開地に居宅を設けたのであろうと思われる。

神宮雜書によると「小高御厨」保安二年（一一二二）、「山口御厨」延久二年（一一一四）共に御厨として、伊勢大神宮神領注文の中に記されている。

神風抄には小高御厨、山口御厨は同所とあるが、荘域が入り合っていて、両者の区別はむづかしい。荒地を買取しての開発領主であり、ちょうど、伊勢神宮の神威を説いて神明社を勧請し、私営田を寄進するように勧められる。神宮の権祓宣の度会忠倫が、山口得丸を説得して、伊勢神宮を本家とし、度会氏を領家としての寄進が成立した。小高御厨、山口御厨も伊勢神宮の神領地となつていたのである。

西山口地区の瀬ヶ谷神明社を中心に山口御厨が池下流域を開発し、

宮脇、葛川にあたる西部平地を開発していたのである。

山口の郷より西の郷を西郷とも呼び小高庄が杉谷、上張、龜甲、下俣、大池、五明、西郷にかけ開発されたのが同所となるように隣接地であった関係で、日根郷も大江公資の赴任以来広経、公仲（広言）を経て、仲子に至るまで、開発領主として三百町歩の預所となり、君臨したことが位置づけられる。



## 豪族の武士化

### 原三郎清益

幡豆郷は平安期に見られる郷名であるが、小字名などを調べると奈良朝時代の呼称がある。室町期に「熊野巨那場配分法文書」に、佐藤孫左衛門が口那職になっている。これは駿河国鶴田備前からの文書で、その名前が出て来る。

戦国期になると明応七年（一四九八）十一月十三日付の今川氏親判物（残編）に「於原要害依袖忠節」とある。孕石そが原の要害で戦功がぬきでいていたので、恩賞を給付したもので、天文二年（一五三三）十月条の尊徳信正の「あつまの道の記」によると、是れより不尽を見むとて、立ち出ける道に原といえる所に、庵主に手習う人の里あれば云々」とある。

鎌倉期より原氏の地頭職としての存在が挙げられる。

天徳三年（一三三三）鎌倉幕府の裁許状に「遠江国原田庄権掌直論・細谷郷地頭原小三郎忠益と所務のこと論す云々」古くより当地方の名族であった。その後、北条記によれば永享十一年（一四三九）鎌倉管領の足利持氏生害の段「持氏、満貞の両御所御自害あり、大御所のお首をは金子入道これを斬り、小御所の御首をは原太郎兄弟これを討つ。金子は常陸国下妻庄にて御恩を蒙り、原兄弟は遠江国にて御恩を蒙る。此等は金澤合戦に上杉憲直に、味して討たれたりし下総守忠政の子なり、下総守はざん言の罪あるに依りて誅せられんと雖も、其の子三人は外祖父の原左馬助貞信の吹挙により京勢に加わり、御所内に乱入し、亡親の忠をあらわし、兄弟三人皆而々に一所懸命の地を安堵せり」とある。又松室録にも、長福寺大且越、遠江守藤原頼景」と云う人の名が見える。その他に原田可興、安芸守景保、叔父原兵部などという人々がいるが、持原氏の一族である。

この原氏は、藤原南家上藤氏族の原田氏で、佐野郡原田庄に住し、工藤二階宗系図に「原工藤大夫建伸・出羽権守師清・遠江権守清仲

一原田権守清延、その弟久野四郎宗仲」とある。清延の子が清益である。清益は原三郎清益で、「源平盛衰記」「平家物語」にもその名が出てくる。源頼朝に従い、平家追討には源義経に従事して功をおさめ、遠江国で地頭職を賜り、遠江国原田に住し、原氏を名乗る。武勇の誉あり、曾い兄弟夜討の時、馳せ合せて戦ったが、疵を蒙って引き退く。建久十年（一一九九）二月十二日没、本郷長福寺に葬る。法名を長福寺殿時安玄宗大禪定門という。

本郷城跡は長福寺背後の丘陵に古城と呼ぶところがあり、清盛の跡がうかがえる。原氏の本拠として累代数百年に亘り領地とした処であるという。

『異本曾我物語（大石寺本巻八）』扇形の次郎寛増語る事の条……

此の門外の陣、左の列は遠江国住人、原小次郎忠義、同小太郎、同三郎と兄弟多人数に渡り合ふ事の条に「その次は遠江国住人原三郎が押寄せたり、五郎時政が打つ太刀に、左の肋骨二枚から腹の骨まで切り付けられてぞ倒れける。……中略……、新田四郎進み出て呼わりけるは如何に。十郎殿……中略……、打組まんとする所に、遠江国の住人原三郎が片腹を斬られて、小柴の蔭に太刀を杖につき寄立ける。かっと寄るまま太刀を押取り直し、十郎の右肩の外れをしたかに切りしければ、太刀の手あはらなる所を、新田忠常が右の乳の下まで切りつけたら云々」と記している。

また、永享の記に功績のあった原下総守忠孝の子、長男小三郎忠益、次男は孕石小六高忠、三男は刑部左衛門尉光忠の三兄弟は、忠益が本家、高忠は孕石氏となり、光忠は本郷の小沢氏の祖となる。特に孕石氏は本家と争い今川氏親、義元に従って地頭職を受け継ぎ、今川氏真を見切って武田信玄に属し、孕石元泰は高天神城において切腹し、その元成は徳川氏の本多家に仕えたが、山内一豊が六万石の大名となるに従い、大名の格式を満たすために仕官して上佐に移るのである。

— 遠江への禪宗の伝播とその確立 —

## 恕仲 天間

恕仲天間しよちゆうてんまは遠州森町橋谷山大洞院の二世。豊岡村下野辺一雲斎の開山。貞治四年（一三六五）、信州上田に生まれる。姓は海野氏。五歳の時に母を亡くし、九歳にして信州伊那郡上穂山（長野県駒ヶ根市）の恵明法師に就いて仏典を習い、法華経を学んだが、省みるところがあつて禅門を慕い、上野国吉



恕仲天間禪師像 森町 大洞院

祥寺（群馬県利根郡）の大拙だいせつ祖能その禪師ぜんしに身を投じ、剃髪した。その後越前国平田山滝沢寺（福井県坂井郡）の開山梅山ばいざん開本かいほん禪師に師事し、悟りを開いた。この時師から「深山に入り、草庵を結んで禅風をより深く養い、みだりに世俗に説法するな」との教示を受けた。恕仲はこの教えを守り、滝沢寺を辞し、近江国塩津祝山（滋賀県）に洞春庵どうしゅんあんという庵を構えた。

その後、『日本洞上聯燈録』に「遠州飯田城主山内対馬守橋はし師道風。遂削崇信寺すいせつしゆうじんじ居之。」とあるように、山内対馬守（山内一豊の祖先といわれている。）という小領主が恕仲の道風を慕い、森町飯田に崇信寺を建て、開山として迎えた。恕仲は応永一八

年（一四一一）に至り、意を決して森町橋に一大寺院を創建し、これを橋谷山大洞院はしやうざんたいどういんと号した。恕仲四十六歳の時であった。これに当たつて恕仲は本師梅山開本を招いて開山となし、白らは第二世となつて禅風鼓吹に力を尽くした。ここに遠江への禪宗伝播



大洞院本堂

の基礎が築かれ、以来今日に至る数百星霜を経て、大洞院は末寺三〇〇ヶ寺にも及ぶ曹洞宗随一の名利となった。恕仲は大洞院創建後も「輪住制」の採用などにより自己の足場を強化し、教線の拡大に努めた。永享九年（一四三七）、七十二歳でその生涯を閉じた。なお、可睡斎後堂鈴木泰山氏は、「じょちゅう」は「恕仲」が一般的に使われているがこれは誤りで、「如仲」が正しいと指摘している。



参考文献

- 『遠州森町橋谷山大洞院縁起論』
- 『日本洞上聯燈録』巻第四
- 『袋井市史』通史編

## 石宙永珊

石宙永珊いしすゐえいさんは掛川市奥野深沢山長松院の開祖。出生は明らかでないが、『長松院誌』に「信陽の人」とあることから長野県の南部地方の人ではないかと思われる。



石宙永珊禪師像 長松院

初め信州の某寺に入りて修行を重ね、遠江下野辺（磐田郡豊岡村）一雲斎の三世川僧せんじょう恵濟禪師に師事して曹洞禪を学び、精進努力して悟りを開いた。

た。その後名師を訪ねて諸国を遍歴し、戦いに明け暮れる戦国乱世の荒れ果てた実情を目の当たりに見て、世の無常を感じ、再び遠州の地に帰り来て修業の地を求めたものと思われる。ある時日坂の付近に至り日が暮れて露泊した時、その夜半夢に観世音菩薩が現われ、「……吾久しく汝を待つ、今幸に邂逅することを得たり、然も汝未だ禪を修め了らず、因て汝に一つの禅地を譲らん、此の西数百歩にして一高燥地あり、沢水めぐりて帯の如く峯に松そびえて冠に似たり、遠俗離塵の勝地にして菩薩修禪の道場なり、我れ積年奥に常住す、汝が化縁真にここにあり」と言い終わって姿を消した。石宙は晝を待って夢で告げられた方向を尋ねると、数百歩でその地があった。長松がそび

え、深沢は帯のようにめぐって静寂が心地良い。石宙はここが自分の住むべき所だとよろこび、破堂を補嘗くしょう、その傍に小庵を結び、修業に励んだ。まもなく道風を慕って随従するものが群をなし数百に満つと、伽藍を創設し、深沢山長松院と名付け、かの観世音菩薩を本尊として安置した。文明三年（一四七二）七月一八日のことであった。石宙は住院十六年で輪番住職として一雲斎に任じ、後大洞院にわたりいたる処降盛をきわめたがある日体を患い、後の事を法兄尾張国乾坤院開山逆翁宗順和尚に託し、文明十八年（一四八六）正月二十六日遷化した。

### 参考文献

- 『深沢山長松院誌』
- 『遠江の古寺 深沢山長松院誌』
- 『曹洞宗全書』史伝

## 松堂 高盛

松堂高盛は遠江佐野郡原田莊寺田郷（掛川市寺田）の生まれで、在野にあって学識の高い禅匠であると同時に、曹洞門屈指の民間詩人であった。その大著

『松堂語録』は一五世紀後半、

応仁の乱前後の遠江の政治情勢や民間事情を知る基本文献となるだけでなく、松堂の到達した禅の境地の深さを示すものである。掛川市本郷長福寺及び幡鎌最福寺に写本が所蔵されている。それによって彼の生いたちをみると次の通りであった。

### 所蔵寺最 語録禅師堂松通円

不肖は当山之麓藤氏の家に産す。父は頑母は臣（やかまし

いこと）也、業を受くること

魯鈍也、当山開基の年にあた

り纒七歳也、祖父道印自ら提携し、二世大輝和尚に謁し、髪を剃つて馴鳥（稚僧）となり、諱を高盛と曰う、時に永和尚侍衣たり、……已に十五の春落髮す、十六より永和尚の侍者となる、……享徳元年壬申の暮春、師を辞し去つて野之

利陽にゆき、略儒書を習い、詩体の律を学ぶ、或は祖語を看じ或は仏教を閲し、吟詠俳徊して已に八春を過ぐす、長祿二年戊寅首夏の頃、故国に帰り本師を觀省す、……（原漢文）

すなわち松堂高盛は永享三年（一四三一）佐野郡原田莊寺田郷（掛川市寺田）に生まれた。家は在地領主原氏の分家で自ら「藤原」を名乗る地侍寺田氏であるといわれる。七歳の時寺田円通院の大輝雲隠の門に入り、剃髪して高盛と名乗った。文安三年（一四四六）大輝和尚の死とともに三世古山崇水の弟子となり、享徳元年（一四五二）二十二歳の春、下野（栃木県）の足利学校に遊学し、儒学、漢詩を学び、仏教を修めて長祿二年（一四五八）二十八歳の夏に帰山した。応仁元年（一四六七）古山禅師の後を受けて三十七歳で円通院四世となった。この円通院も明応三年（一四九四）北条早雲の兵火によって焼きつくされた。松堂はこの中遠の地にあって積極的に曹洞宗の布教に努め、原谷本郷の長福寺、幡鎌の最福寺を再興し、また明応五年（一四九六）城東郡朝比奈郷（浜岡町）に閑田院を創建し、閑山となつて「閑田録」一巻を著した。彼は中遠地域に独自の禅風（「詩禅一致」・「三教（儒・仏・道）一致」といわれる）を打ち出し、曹洞宗の普及に大きな足跡を残した。永正二年（一五〇五）十一月十一日七十五歳でその生涯を閉じた。

### 参考文献

『掛川誌稿』

『掛川市誌』

『郷土の開発に尽くした人々』 江戸時代

『日本洞上聯燈録』巻第七

『袋井市史』通史編

## 掛川城を築き今川政治をたすけた 朝比奈備中守

文明初年掛川城を創建した朝比奈氏の先祖は八百年前都より駿河国へ配流された中納言藤原兼輔朝比奈太郎朝比奈郷に住み、岡部村仮宿の八幡宮に祈願して授けた子が吉泰といひ、兼輔が許されて都に帰った後この地であつて朝比奈、岡部両氏の祖となり一族は地方豪族として勢力を伸した。元弘の変と中先代の乱に足利尊氏に従ひ軍功を立て遠江、駿河の守護職となつた今川に重用され、駿府で家老職を勤めた。応永の乱の後遠江は尾張の守護新波義重の支配となつたが東遠掛川の附近は両勢力の接点で応仁の乱に上京した今川義定は文明五年將軍義政より懸河の代官を命ぜられこの地に城を築いて朝比奈氏が城主となつた。朝比奈三代は泰熙、泰能、泰朝で永正十年に新城の完成からして文明五年の場合朝比奈系図に泰熙の父泰永が遠江岩土に築城した記事があり古城の築城に当ると考えられる。当時掛川周辺には遠江三十六人家とよばれた初馬の川合宗伸、西郷に西郷殿、倉真の松浦兵庫、掛川の鶴見因幡守、本郷の原殿、原谷の孕石主殿等の土家があつた。永正十年酉年朝比奈備中守三千石御建被成るとありこれは掛川邑を中心とした掛川庄といわれる数ヶ村であらう。泰永、泰熙の古城は東海道古道に沿う天王山子角山に城砦を築き第一小学校あたりに館を設けて中世城郭と城下町を作り、また周辺の斯波氏に従う反今川勢を駆逐し、漸次今川配下に帰属させて泰能、泰朝の頃は現在の市域に相当する二万六千石を支配した。永正十年に完成した新城は近世の本丸山を中心として本城、二の曲輪、三の曲輪と堅固な城を築き、驛路を逆川の南に付け替え、城の南に松尾町、大手口を現在の中町に

その東に連着座という座市を設け商人を集めた。驛路に沿つた中宿西宿から住民を移して中町西町をつくり、仁藤村の一隅を仁藤町として伝馬の駅とし地子を免して町民を保護した。城の両側には駿河から随従した武士と領内の郷土が屋敷を構え、中世の城下町が造られた。朝比奈泰熙は永正九年十二月逝去し、その子泰能が幼少のため伯父の泰以が大永二年まで補佐したという。この年連歌師の宗長は掛川城に逗留して「この頃は普請の最中にて外城をめぐり六、七百間堀を穿り本城と均しく土居をあげ本城と外城の間の堀は冷々として覗くもいと危し、南に池あり輝高水濶くして大海に似たり」と手記に記している。弘治三年八月晦日泰能が死去した。泰能の奥方は都の公卿坊城大納言官秀卿の娘という。その子泰朝が継いだ。永禄十一年二月徳川家康と武田信玄は駿遠両国の今川領分割を約し、信玄は十二月十三日駿河に侵攻、今川家臣の多くは主家を捨て優勢な岡氏に内通したため今川氏貞は一戦に及ばず、僅か七十余騎の旗本と共に朝比奈の谷から土岐の山家に逃れ、掛川城の泰朝を頼つた。主君の窮状を見るに忍びず居城を捨て迎え入れ、四散した今川の勇者を招き集めて掛川の家臣団と共に總勢三千余人（或は七千余人）が掲げて城を守つた。徳川家康は遠州の今川領に侵入し、二十一日には三河勢が周回し付城を設けて攻めを固め、翌十二年一月、三月と城をめぐる激戦が繰り返されて攻、守の双方に死傷者を出したが、家康は今川家に恩顧もあれば攻め亡ばさず和を結び、五月七日氏貞は城を開き北条氏康を頼つて掛塚の湊から海路伊豆の戸倉に移つた。泰朝も小田原に移り、天正十八年秀吉の小田原城攻めるとき城内で活躍したという。その後一族は幕臣や紀州、水戸その他大名の家老になつてゐる。

——徳川家康の側室お愛の方とその一族——

戸塚五郎太夫忠春

忠春は、徳川二代將軍秀忠の生母・西郷の局の実父である。

『掛川誌稿』によれば「三州(三河) 西郷彈正左衛門正勝の女

を妻とす。百姓にあらず。今

も戸塚という所ありて、住せ

し所なり」と書かれており、

西郷戸塚の住人であったこと

がわかる。今川家に仕え天文

二十三年(一五五四)春、遠

江国大森の軍で不運にも討死

してしまつた。

里の戸塚

忠家 (お愛の異母兄)

嫡子四郎左衛門忠家は父の

後を継ぎ今川家に仕えたが後

家康に召し出され御家人とな

つた。所々の戦に出陣し功を納めた。その後、命により武州川

越城の城番となる。文録四年(一五九五)六十歳で没し、天竜

寺に葬むられた。

心翁 (お愛の兄)

次兄は、西郷滝ノ谷の曹鷄山法泉寺に入って、仏弟子となつ

た。名を心翁といひ法泉寺七世である。後、江戸に赴き天竜寺を開く。この天竜寺は、家康が江戸に入った時江戸城鎮護のため創設したものであつて、二代將軍秀忠の叔父である心翁が任職になつた。だから天竜寺の七世までは法泉寺の住職と全く同じであつて、春屋宗能和尚を開山とし実質開山を行つた心翁自身は中興の開山となつてゐる。又、心翁の父五郎太夫の位牌も祀られてゐることをみても天竜寺と法泉寺、西郷と戸塚家、西郷と西郷の局等は深いつながりのあることがわかる。

西郷の局 (お愛の方)

名はお愛又は昌子ともいふ。父は戸塚五郎太夫忠春で、「お愛が三歳の天文二十三年(一五五四)春、遠江国大森の軍で討死す。」と『掛川誌稿』は述べてゐる。母は西郷彈正左衛門の女。父の死後、母は縁あつて浜松の服部平太夫正尚(伊賀の者)と結ばれ、お愛はそこで成長した。そして母方の西郷右京進義勝の妻となり二児をもうけたが元龜二年(一五七一)夫の義勝は武田の手者に討たれたのでやむなく母の元に戻つた。

お愛が浜松城に召され家康に見出されて傍近く仕えるようになったのは天正六年(一五七八)春のことである。やがて西郷の局と称され産砂神である西郷の五社大明神を城中に勧進し尊信したといふ。そして天正七年(一五七九)春、長丸君(後の秀忠)を、翌年秋、福松君(後の忠吉)を出産したのである。家康は西郷の局の介添役として倉真姫をつけてゐる。また出産に当たつては平太夫の屋敷を産所としたので、局は産土神を移し社殿を造らせて尊崇したといふ。これが浜松の五社神社であ



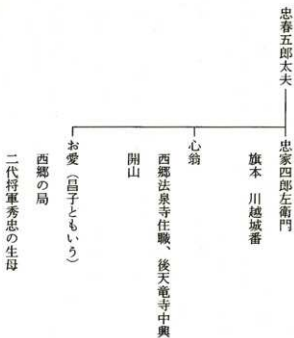
る。局はその後駿府入りしたが、浜松時代の長かった苦勞の疲れから病を患い、天正十七年（一五八三）五月十九日三十八歳の若さで居住の駿府において没した。法名を竜泉院松誉貞樹大姉といい、竜泉寺に葬られた。後、將軍職についた秀忠は、若くして逝った母のために盛大な法要を営み、寛永五年従一位を贈られ、勅使が駿府に遣わされたとき、法名も竜泉寺を改め宝台院殿一品大夫人松誉貞樹大姉を賜った。

なお、天竜寺にも西郷の局の位牌が祀られているのは兄心翁が早逝した妹お愛の菩提を弔ったからである。



西郷の局の墓（お愛の方）

○戸塚家系図



豪傑武將

## 石ヶ谷十蔵貞清

石ヶ谷十蔵が二代将軍秀忠に仕えるようになったのは、慶長十四年（一六〇九）十六歳の時であった。元和元年（一六一五）



石ヶ谷十蔵貞清・拍江（東京都）泉庵寺蔵  
ため卓清は意を決し単独で秀忠の駕の後備えに加わり、長い道中徒歩で警護の務めを怠りなく果たしたのである。

秀忠は伏見においてこれを賞し、銀子三枚を賜ったということである。戦場では秀忠の馬側を離れず敵状を窺い機敏に報告することを忘れなかった。落城間もない頃のこと、大雨になったがこれをもとめせず秀忠の居所近くに伺候し警護の任にあたった。秀忠が夜半に障子を明け再度にわたり名を尋ねられたほどであった。こうした功績が認められ夏の陣後、上総国において三百石の采邑を賜り、後更に二百石を相換にて賜ったのである。

寛永十年（一六三三）監察使に補せられ同十一年甲州におい

土岐山城守定義の配下となり、大番を務める。大阪夏の陣がおこった時、定義が江戸城警護の役についたため貞清意にそわず、軍に従うことを願ったが聞き入れられなかった。この

て千石に増加され、幕府内に地位を固めていった。寛永十四年（一六三九）九州で島原の乱が起った時には幕命を受け三河の板倉重昌と共に鎮庄に赴く。集り来た山陰山陽九州の諸軍勢を指揮して島原城を攻めたが中々落ちなかった。そこで翌十五年の元旦を期し総攻撃をかけたが利にあらず、重昌は討死し貞清自らも傷を負ってしまった。それでも怯まず陣中を馳せめぐり鼓舞して廻ったという。更に援軍も加わり二月二十七日より翌朝にかけて城に攻め入り遂に落城させたのである。合戦では貞清自身先頭になつて戦場を駆けめぐり、城兵の首級をあげることに数度に及んだという。この乱後、老中に呼ばれ犠牲の余りにも多かつたことの申し聞きをさせられたがたいしたお咎めは受けずその後も奉公に及んだ。正保四年（一六四七）六月十八日江戸町奉行という大役を努めた。従五位下に叙され左近将監に任ぜられた。萬治二年（一六五九）病を得るまで十年間奉行として将軍のお膝元である江戸の治安維持にあたつた。寛文十二年（一六七二）九月十一日七十九歳で没した。

法名 空照院殿心嶽宗鐵大居士 江戸泉庵寺に葬る

貞清は文禄三年（一五九五）遠江国上西郡村石ヶ谷、五郎太夫清定の次男として生まれた。石ヶ谷に住んでいたから石ヶ谷を名乗った。力持ちで武術に優れ、また疾駆する馬上から弓を射ることの妙技は抜群であつたといわれる。秀忠・家光・家綱の三代にわたつて徳川家に仕え、徳川幕府の基礎を築いた一人といえよう。剛にして柔、柔にして剛の両面をもつた肝っ玉の太い武將であつた。



## 近世の掛川の基礎を作った 山内一豊

天正十八年小田原の戦が終わって関東の北条氏が滅びると天下を握った豊臣秀吉は東海道の雄者徳川家康を本国の三河とその領国遠駿甲信の五ヶ国から北条氏の旧領関八州へ移され版図を拡げた。

東遠掛川は永禄十二年今川の家臣朝比奈泰朝から徳川家康の手中に入り旗頭の石川日向守・長門守父子が守衛したが、このとき、近江国長浜から山内一豊が掛川城主として封ぜられた。

一豊は、天文十五年尾張国黒田城主で岩倉の織田信安に仕えた山内盛豊の子として生まれた。少年時代戦乱で父と兄を失い苦難を重ねた。初め猪右衛門といひ、信安に仕え、次いで信長に仕えた。元龜元年越前金崎、姉川の戦には秀吉に付属し、その戦功で江北の長浜唐園で四百石の地を授領し、天正元年頃、内助の功で有名は妻千代（或は「まつ」と結婚した）と結婚した。五年播磨で五千石、十年信長の没後は秀吉麾下の武将として活躍し、十一年賤ヶ岳の合戦、翌年小牧の戦に参戦その功績で加増され、十三年長浜三万石の城主と直領の代官を勤めた。小田原の役には秀吉の先鋒として山中城を攻め、更に小田原城の攻囲に加わった。戦後の恩賞では家康が関東に移されると、東海道の駿府には中村一氏、掛川に山内一豊、浜松は堀尾吉晴といった腹心の武将で固めた。

掛川城主となった山内一豊は領内の支配にふさわしい陣容を整えて入国した。佐野・榛原の領国五万石を支配する掛川城主として関東の防衛に当り、一宮神領の代官を勤めると共に秀吉に仕えて大阪城、伏見城築城の出動も負担した。文禄征韓の役には大井川の川尻で松下綱吉と共に軍艦の建造に当った。慶長五年

まで十年間掛川にあって城の大改修と、城を中心に武家屋敷、東海道沿いに町割りをし、商人、職人の町屋を造成した。領内の検地を行って経済基盤と支配体制を固め、入国のとき従えた武士に加えて、上着した今川遺臣を家中に召し抱え軍役を充す武士団に拡げ、近江より來住した町人やこの地の有力者を町や村の役人とし庄屋はじめ諸職の地位を与えて民政に参与させ、城下の商人や職人を保護して町を発展させ領内の需給の便を図った。

秀吉の没後家康に近づき慶長五年六月の上杉征伐には家康軍に加わり一足先に掛川へ帰り、佐夜中山に茶亭を設けて供応した。七月二十四日小山の陣で軍議のあり、妻が大阪より下僕の笠の緒文として送った西軍の動静を知らせる書状と増田長盛、長東正家等からの西軍動誘状を開封しないまま添えて差し出し、家康に従うことを表明したので、東海道の豊臣系の武将もこぞって従い、東國を結束させて天下を決する端緒を開いた。一豊は城を譜代の衆に預けて先鋒に立ち、九月十五日関ヶ原で有馬則頼と共に野上に出陣し南宮山の毛利秀元に備えた。この合戦の功績により長宗我部郡の旧領土佐一國二十万余石を賜わり、直ちに情勢不穩な現地に掛川武士団を率いて乗り込み、浦戸を足場に高知城を築いて八年完成して新領国の支配に当った。

一豊は京都花園の妙心寺の塔頭大通院の壇越で信心深く、高知に移るとき掛川から真如寺・円満寺・養法寺を移した。戦国の雄信長・秀吉・家康の三氏に仕え、才智に富んだ妻を支えられた一豊は、四十五歳から五十五歳の人世の円熟期の十年間掛川にあり、領国の中心として掛川の町造り、領内の経営に尽力し、近世掛川藩領国の基礎を作った功績は偉大である。慶長十一年九月二十日高知で逝去。享年六十一歳であった。

## 日坂宿問屋 片岡清兵衛

戦国時代以来、日坂は馬子唄に「佐夜の中山ヨヤレヤレー 夜ふけてとおりや、鹿の友呼ぶヨ 声がするナエー ヨイシヨヨイシヨ」と、新緑の樹々にこだまして東海道中の花の街と唄われてきた。

扇屋本陣には次のような語り草が伝えられているし、文書にも残されている。天文十一年（一五四二）と、永禄三年（一五六〇）の二度の尾張攻めをした今川義元が、帰途をこの日坂の問丸に泊まり、長者のもとでなしたを受けたお礼に、義元公の手より扇子を頂戴したので、この扇屋の屋号の起りである。

その扇屋は、名字帯刀を許され、片岡金左衛門を名乗っていて、問丸職を承けていたのである。穩州して清兵衛を名乗った。

戦国以来、次第にその形を整えてきて宿場町になるのであるが、その道筋は現在の旧道よりも因道一号线の道で、古宮橋は国道一号线の橋より少し川上にあつて、相伝寺のところに、扇屋の元屋敷があつた。その扇屋の前を通り、角屋より右折して旧道を石橋を越えて、由衛門様の道を登り、清水へ登りて、お飯屋の下を行き、七曲りに入つたといわれている。

この道を、旧道の町並にしたのが、慶長元年（一五九六）で、本陣、問屋場を中心に置き、一般の旅客の宿屋が三十三軒その両側に発達してきた。日坂宿は大井川の川留めの宿場町と、駅馬、伝馬を中心としたもので、路側に水路を設けて、馬の水飲み用の水路を通してゐる。また、階級、身分によつて宿泊する宿屋がきまつていた。日坂宿では慶長六年（一六〇一）の検地で、伝馬屋敷分が四石一升一合伝馬役三十六軒の居屋敷が四〇歩の見積りとして四石八斗目を賜つた。また人馬の荷積を一駄につき三〇貫と規定した。

しかし、幕府・大名などは公用として無賃で使用していたために伝馬人たちの生活は困窮を極めたのである。そこで片岡清兵衛は宿

場町の発展と伝馬人の生活を見るに忍びず、直訴に及ぶのである。直訴は大逆であり処刑はまぬがれないことを知りながら、「すはき米」の下げ渡しを幕府に訴えた。

このため「五百十六俵」の煤米が補償され、元和二年（一六一六）には一軒当り七斗目の給付が許された。

片岡清兵衛は文亀元年（一五七〇）に旅人が当時大蛇の難に逢つて難儀をしているのを救うため、長松院の教之一訓禪師の弟子の覚雄宗鑑和尚を招請して、自己所有一町二反の山林田畑を寄進して、竜谷山常現寺を建立し、大蛇の難を救い、仏法を広めた。その間基として日坂宿伝馬人衆の供養塔が建立されている。この供養祭は毎年三月九日、清兵衛の卒死の日に伝馬人たちが集まつて営まれていたといふ。

卒死以後、片岡家は曹洞宗より浄土宗にかわり、宝珠山相伝寺に墓地を移し、片岡院殿松翁源長大居士の法名で葬られている。

相伝寺は古宮の川原地に慶長八年（一六〇三）に建立されていたが、幾たびかの水害に見舞われ、慶長十八年（一六一三）に扇屋の元屋敷に移築された。この寺は浄土宗鎮西派の小本寺で京都知恩院直末である。

このように片岡清兵衛のおこした事件は、戦国期に頻繁に勃発した百姓一揆の形が、江戸期の初期において問屋・庄屋の直訴の形で、ご政道の世直しを願つたものであらう。日坂宿を通行する旅人の便宜を図ること、日坂で生活する人たちの幸福を守るための仕事等、宿場町の繁栄化を進めるための多くの事業がいろいろな形で現在も残されている。

## 幕府老中を三度勤めた名君 太田資始スケモト（道醇）

掛川藩主太田資始は寛政十一年近江国宮川藩主堀田正毅マサシの三男として生まれた。文化七年太田資言ノリノリの養子となり同年遺領掛川五万石を相続した。この年松崎懋堂について教養館を設け「徳造書院」と称し、藩学を興し文武の両道を奨励した。文化十年従五位下備中守に叙任され、文化十三年の秋、駿遠一帯を襲った台風汐風による不作は百姓一揆を誘発したが、掛川藩は幕府貯穀や備蓄米の放出により領内の救済を行い一揆に加わった東手の百姓に対しても他領に較べて寛大な処分がとられている。文政元年奏者番となり、翌二年領内に儉約令を出したとき藩主共々に節儉を旨とするように論じた。三年十一月養父資言の娘篠姫と結婚。六年に寺社奉行となった。この年文政元年に焼失した城内の大猷院霊屋を再建遷座している。九年御定書掛となり、文政十一年に大阪城代となり従四位下摂津守に叙任された。天保二年京都所司代となり、このとき宇治平平等院の願の芝の古跡の修復を行った。これは源頼政がその先祖であったためである。天保四年皇居の常御殿その他の修復、泉御殿の造立が竣工した。また領内には「慶安御解書」を版行頒布した。七年幕府の老中木莊宗堯が辞任した後をうけて八年四月に老中となり、大納戸御用を勤めた。このとき大老は井伊直亮、老中は水野忠邦であった。翌八年は天保の大飢饉に見舞われ、諸國で飢民が騒動を起した。掛川では藩主自ら「松皮食用法」を布告するほど窮民対策に取り組み領内で餓死者を出さなかった。天保十二年六月老中主座の水野忠邦の改革があまり厳しすぎたのに反対して病氣を理由

に老中を辞し、家督を嫡子資功に譲って隠居し道醇ノリノリと改めた。弘化二年に病氣も回復して前將軍家齊の霊屋参詣、翌三年より年頭に登城し幕府の諸行事に出席している。

安政五年四月井伊直弼が老中となると勅許をまたず日米修好条約に調印した老中堀田正睦、松平忠固を罷免し、太田資始、間部詮勝、松平乗全の三人を老中とした。備後守に任ぜられた資始は熱心な開國論者で通商許可の立場をとり、開港を主張して江戸に来る外国人を自邸に招いて意見を交換するなどし、英、露、蘭、仏の四ヶ国と仮条約を締結した。翌六年安政の大獄には大老と考えを異にし寛容を主張した。また將軍家定が五年七月に病没し後継者に家定の従弟十二歳の紀州の慶福ノリノリ（家茂）と水戸斉昭の子二十二歳の一橋慶喜の二人が候補に上ったとき慶喜推戴に加わった。十月に大老の擁立した家茂が將軍となり翌六年慶喜を推した松平慶永派に弾圧が加えられ、資始は七月二十二日病氣を理由に老中を辞したため直弼は怒って八月九日、謹慎を命じた。

万延元年三月井伊大老が桜田門外で斬られ、同年九月謹慎が解かれた。文久二年正月將軍の御座間に年頭の御礼を為す。三年四月二十七日老中の加判上座として御勝手方御入用掛り、外国御用の取り扱いを勤め役料年三万俵を賜わり、名を備中守と改めた。在職十七日で老年で耳の遠いのを理由に辞任した。これは政治総裁川越城主松平直克に疎まれたためといわれる。元治元年には將軍の御用部屋勤めの特命を受けた。

維新の風雲の急を上げる慶応三年五月十八日江戸駒込の邸で死去した。法名を榮隆院殿道醇日忠大居士と諡し、三島市玉沢の妙法華寺に葬られた。

## 西洋医学発展の先駆者 戸塚 静海

掛川藩医として名を残している人は、横地氏の一族で戸塚の里より掛川に移住してきた戸塚玄寿に關係した人々の名が挙げられる。しかし当時、各地にはそれぞれの家伝の妙業や技術をもち同医方を伝える、伊達・福岡・堀内・本間の医師達がいた。

戸塚玄寿（初代・隆伯）の子は維義（二代目・隆伯）といい、培翁と号した。その姉の夫に十束隆賢がおり、その子が蘭学者で外科医である十束井奇である。戸塚培翁は四男二女を儲け、長男は早世、次男は三代目隆伯を継ぐ春輔がおり、三男に静海、末弟には駿府に居て漢学と共に医学に貢献していた春伯がいた。

中でも、戸塚静海の活躍は日本の西洋医学を進展させた功労者として忘れることができない。

静海は寛政十一年（一七九九）に戸塚培翁の三男として、喜町に生まれる。幼名を春輔と呼ぶ。文化十四年（一八一七）江戸に出て、医学を学ぶ傍ら、掛川藩儒者の松崎儂堂に漢学を、十束井奇に蘭学を学び語学の力を強めていった。

文政三年（一八二〇）には日本の西洋医学の権威者である字川川藤斎に入門して学業に助んだのであるが、更に医学を究めるために、文政六年（一八二三）シーボルトの居る長崎へ訪き鳴滝塾に入って西洋医学、特に小児痘瘡や麻疹の研究を専門にその他、植物学・動物学を学んだ。中でも臨床外科については素晴らしい力を発揮したといわれている。

しかし、シーボルト事件に巻き込まれ門人三十余名と共に投獄されてしまった。その後、事件の疑惑が晴れシーボルトは国外追放、弟子達も自由の身となったがシーボルトのいない鳴滝塾を再び建てなおすため人々の推薦により静海が塾頭として弟子達の指導に当たったのである。

天保二年（一八三一）五月十二日、掛川に帰郷したが十一月に再

び江戸に出て医業を開き治療に専念した。名医の噂は、たちまち諸国に知れわたり薩摩藩の大名島津斉彬侯から強く望まれて待医となった。また、このころ掛川藩の太田侯にも仕えたいという。静海がその腕を発揮し始めたのは安政四年（一八五七）頃から動向をみせていた天然痘予防運動である。天然痘は別名痘瘡と呼ばれ、重ければ死ぬか治っても顔じゅうにあばたの残る大変恐ろしい病氣と考えられていた。しかし当時は漢方医が盛んで幕府の方針も西洋医学は外科と眼科のみ認めるという状況であった。こうした中、痘瘡の流行に對して西洋医学の力が発揮されてくると、静海は数人の蘭医らと相談し種痘所建設の「伺書」を幕府勅定奉行、川路左衛門尉聖謨を通して老中へ申請した。開設許可までに種々の反対運動もあったが、安政五年（一八五八）、幕府より認められ開設のはこびとなった。こうして、静海は伊東玄朴等と共に八十余名の寄付のもと、江戸神田に私立「お玉ヶ池種痘所」を創立し西洋医学の研究に務めたのである。また、幼少の頃痘瘡にかかり病弱だった十三代将軍家定が重い脚氣にかかると、幕府は蘭医の採用を余儀なくされて、静海は伊東玄朴、竹内玄洞らと共に人選されて侍医となり法印に叙せられたりした。西洋医学の道に志してようやく医業の仁術が天下万民に認められたのである。また西洋医学発展の第一歩となったこの種痘所は、現在の病院、保健所、医学校を合わせたような機能を備え、病人の手当て、種痘、保健活動更に新技術を伝える所として幅広い活動が行われた。万延元年（一八六〇）には「官立種痘所」、その翌年文久元年には「西洋医学所」、文久三年（一八六三）には「医学所」、明治元年（一八六八）には鎮守府の所管、翌年には「大学東校」、明治四年には「東校」、明治五年に「第一大学区医学校」とその名称は種々に改称され、現在の東京大学医学部に至っている。

なお、静海には子どもがなく、文海を養子として迎えて明治九年、その波瀾の生涯を閉じたのである。時に七十五歳であった。墓は東京都谷中の天王寺にある。

## 宗徧流茶道と小笠原氏

山田宗徧は、寛永四年（一六二七）京都長徳寺に生まれ本姓は仁科氏であるが、後母方姓の山田に改めた。六歳で茶道に志し、十八歳で千利休の孫千宗旦の門下に入った。以後次第に頭角をあらわし、利休直伝の理念である、「佗び精神」を全うした。

正保二年（一六四五）参州吉田（現・愛知県豊橋市）城主であった小笠原老岐守忠知は、華美驕奢な茶道を非難し、本来の茶道は利休正統「佗び茶」にあるとして、明暦元年（一六五五）宗旦の推挙により四天王の一人山田宗徧を吉田藩の茶道師範として迎えた。この時、宗徧は師の宗旦より印可を受け新しい流派をつくった。これが宗徧流の初まりで、以後宗徧一族は、代々小笠原氏に出仕することになるのである。

宗徧は、小笠原家に突に四十三年間、四代（忠知・長短・長祐・長重）にわたって仕え、初めは三十石五人扶持を賜わり、後百石に増加されて吉田城内の武家屋敷に居住し、二覺向坂の茶室を構えた。（この茶室は、掛川円満寺に移されたが、享保二十年岡崎の明源寺に贈られ現存している。）元禄十年（一六九八）長重が武州岩槻（現・埼玉県岩槻市）に転封したとき退職、江戸本所二丁目に不審庵と称する草庵をかまえ茶道の真髄に努めた。

元禄期の江戸は、文化の爛熟期で風俗は華美を極め、茶道も貴族趣味的な奢侈遊楽の体であったため宗徧の「佗び茶」の理念に共鳴する者も多く、次々と草庵の門を叩き宗徧流茶道は着実にその基盤を固めていった。その門弟の中には赤穂浪士の一

人高子葉もおり討入りに絡んだ宗徧との逸話も残っている。

宝永五年（一七〇八）正統派茶道の普及に努めた宗徧は、八十一歳で没し東京願龍寺に埋葬された。法名を不審庵周学宗徧居士という。家元二世は彼の養子である宗引がひき継いだ。

時に小笠原家は、正徳元年（一七一二）長照の代に掛川へ藩替えとなり延享三年（一七四六）まで長庸、長恭と三代にわたって掛川藩主を務めた。この時山田一族も掛川の地に移住している。

宗徧には三人の男子があり、長男は早世したが下の二子はいずれも武事を嗜み、小笠原家に出仕した。二男は弥之助（のちに久右衛門と改める）と称し、小笠原家の近習・近習役として百石を知行したが、のち剃髪して宗歴又は桃葉庵大信と号して茶道に精進した。享保十九年（一七三四）五月二十五日掛川で没し西町円満寺に葬られた。三男の権平は故あって母方の生駒姓をなりの小笠原家に仕え近習頭となったが老年になって茶道に志し、宗達と号した。享保十九年四月二十六日没、円満寺に葬られている。

このように、宗徧の嫡子は二人とも武人として小笠原家に仕えたので事実上の宗徧流家元の後継者は甥の宗引がひき継いだ。父は小笠原藩医・福地久庵、母は宗徧の妹である。宗引は元禄十年叔父宗徧の小笠原家退職と入れ替わりに出仕し、宝永四年（一七〇七）四月十七日正式に山田姓を継いだ。この時、五世不審庵もひき継ぎ醜齋と号した。小笠原家の御茶頭として実力を発揮し茶杓を削ることに妙を得ていたといわれる。享保九年（一七二四）三月二十九日五十七歳で没し、円満寺に葬られた。法名を宗引日休居士という。



宗引は一子をもうけたが早世したため宗偏の三男生駒権平（宗達）の子、宗圓を迎えて養子とし家元三世をひき継がせた。彼は不審庵・力囲斎と号し代々の小笠原家御茶頭の役目を果たし宝暦七年（一七五七）三月二十日四十八歳で没した。

この間小笠原家は、三十六年間の掛川藩在任に終止符をうち延享三年（一七四六）に奥州棚倉（現・福島県西白川郡棚倉町）へ藩替えとなった。その後、文政元年（一八一八）、長昌の代に唐津（現・佐賀県唐津市）へ移され明治を迎えた。

宗偏流は、千宗且流（表千家三世）を基本とした利休直伝の「佗び茶」であるが宗且の隠者風に比べて、宗偏流は武家風の力強さを加えているという。現在、茶道の流派には三十余の分派があり、全国的には表千家、裏千家が圧倒的に盛んであるが遠州地方では、宗偏流を保護した小笠原氏が掛川藩主として三十数年この地に在任したことも要因となり、普及発展したものとおもわれる。

なお、歴代の宗偏流家元達は、小笠原家致仕後、江戸に出て茶道の民間普及に努めたという。

山田家の菩提寺である西町の円満寺には、宗引一族の墓碑があり、また当時に偲ぶ遺品として、宗偏ゆかりの茶釜や茶臼、赤穂浪士の討入りに関わりある茶入籠（宗偏作、桂川の花籠）等を蔵している。

- 一世 山田宗偏
  - 二世 宗引
  - 三世 宗圓
  - 四世 宗也
  - 五世 宗俊
  - 六世 宗学
  - 七世 宗寿
  - 八世 宗白
- （吉田）（岩橋）（掛川）（榎倉）（唐津）（唐津）（唐津）



宗偏流二世 宗引の墓(西町) 円満寺

宗引の子（早世）

宗偏の二男（宗屋）

二世宗引

宗偏の妹

宗偏の三男（宗達）

参考文献

『掛川市誌』  
『郷土の発展に尽した人々』①江戸時代

## 伝統工芸 葛布問屋 三文字屋莊右衛門

東海道五十三次の掛川宿の絵の中に、三文字屋の暖簾が描かれている。葛布問屋が数多い中で代表的問屋であった。

貝原益軒の著わした「大和本草」の中に「ふじ衣は是本朝古代の裏服なり。藤皮はこわくして布に織りがたし、織りても貴者は服しがたし。葛布を用ふ。是藤衣なり。葛布は和漢古来常服に用ふ。古俗かづらをすべてふじと云う。河内のふじい寺も古来葛井寺と書けり。葛布にて製せし裏服をふじ衣といふ。」

また、その他の書物、「百草露」「和名抄」「拾遺集」「源氏物語辨の巻」などにも葛布は裏服として記している。

万葉集巻七の施頭歌に「たちのしりざやに、いりぬに葛引く吾妹、真袖もち着せてむかとも夏葛刈るも」をみなえし、生ふる沢辺のまくず原、何時かもくりて我衣に著む」と二首が歌われている。このように葛布の使用が記録されている。

延喜式巻第十四に「縫殿式雑用度の項に深紫・浅紫・深緋・茜染などの項に染め方が規定されている。これは宮中の単袴等に用いられていたことになる。

「さしぬき」として鞆鞆に用いられ、更に鎌倉期になると馬乗袴に使われたことが「古今著聞集」などに出てくる。これ等からみると、葛布は全国的に作られていたことが解るが、掛川を中心とした地域は、量産されて「掛川の特産」となったのである。

鎌倉期で、鶴岡八幡宮神前にて静御前の舞を頼朝が賞版した後、原田莊西山城主工藤信濃守祐光が、「葛の直垂にて出給うを頼朝御問いあらせられた候時、此紺葛布は当国の物産なり。」と答えている。「これもこのところ習ひと門毎に葛てふ布を掛川の里」と藤原為相が詠みあげているように、掛川の名物となつたのである。

江戸期になると用途が、裏服と袴類から発展して、小紋染の社袴

地や合羽・蚊帳等に広がり、無地物から織物が創造され、経糸が木綿、絹糸を染め、更に緯糸の葛子を素のままや、紺・茶に染め、織り方も平織と綾織が出来てきている。

葛布問屋たる三文字屋兵衛莊右衛門の綿張によると、色合いの種類も、黒茶白上り縞、紺にえび茶目引、煤竹白縞、利久返し、紺白上り、萌黄白上り等等、二十種で柄分けは二百に余るものが注文に応じられるようになっていた。こうした技術開発が一層、掛川葛布の名物として全国に広がっていった。

また、全部の経糸か綿割かに絹糸を用い、緯に針裂きという細断な葛子を織つたものが工夫され、繕と称した。針裂きは手先柔かく、気分も寛かな武家の子女の内職として作られ、その布は家中品として珍重された。そのため問屋はこれを喜んで引き取っていったという。粗く太い物は町や村の民家の婦女や、自営として行う仕事であった。

民家や少数の藩士の家庭の機織（はたおり）は、自分で山野に葛蔓を採取し、葛子を作り、布に織つた自家製品と、葛蔓や葛子を農家から買入れて、機織だけをした場合とがあった。

機は他機（居座機）で木綿巾であり、経糸の仕掛方や綿割りは、当時の他の機織の場合と変わらないので、賃かせぎとして普及されていったといわれている。

織り上げた葛布は、葛粉の糊をつけ、つや出しをかけて商品に仕上げられて、問屋に蒐集されて販売される。だから問屋と生産者との貸たい契約が成立し、製品により価格が異なつたようである。天保十一年（一八四〇）当時の値段は、長尺物（社袴地）諸織の極上品で白にて一反は金二分二朱位。下品は金一分二朱位。短尺（染袴地で花色）一反で金一分前後、下品は銀十三両、平織（片羽）袴地一反で銀十両位、下品は銀八・九両であったと、大藏永常の「製葛録」に記されている。

## 渡山得船和尚

西郷暖の東山麓に、等高線に沿ったようにして用水路がつくられている。水源は倉真川で源作に取入口をつくり水路は五社大明神北裏、石畑地区中央部、西郷小学校東、御堂ヶ谷下山、大行院原等をへて八幡池まで延長二キロメートルである。

夏は勿論のこと冬でもきれいに澄んだ水が洋々と流れ、そこに水車があつてのんびりした杵音をたてながら米をついていた。井水に近い家々では、めいめいに洗場をつくって鍋釜をはじめ洗濯などもやっていた。こうした眺めは昭和十年代までは見ることができた。

ところで、上西郷南部地区は掛川藩でも主要な米の産地である。この産地を潤す水は八幡池の水で、出してもすぐ元のようになり溜まってしまふ具合のよい池である。この用水路づくりには今も語り継がれている物語があつて、宝暦年間に御堂ヶ谷の徳雲寺に渡山得船といふ和尚がいた。この和尚、夜々提灯を持っていずこかに出かけていくことがしばしば続いた。こうした後で庄屋善右衛門は村の主な人々を集めて八幡池へ水を入れる用水路づくりの相談をもちかけた。善右衛門は大変人徳のある人で得船和尚とは意気のあつた親しい間柄であつた。そこで得船和尚は村人に「善右衛門さんと土地の高低を調べてあるからこの岡の所へ作れば水は必ず八幡の池へ入る。」と説を申しながら説明したという。これはあらかじめ夜提灯で高低を測量してあつたからである。人々は周到な準備と計画に驚嘆しながらも早速実行にうつすことにした。倉真の庄屋には事前に了解を得ていたので、倉真川の源作という所に取入口をつくり、水路を掘つ

て八幡池までの水を引くことにした。構江東の湿地帯を通す仕事が一番難事だったといわれる。これには「懸樋」という特別な工法で通した。ぬかるみの湿地に磔を敷き地盤を固め、更に石積み樋（今のU字溝のような形）をその上に造り水を通す方法である。この懸樋は現在も残っている。宝暦二年（一七五二）のことであつた。

### 八幡ノ池

その後、得船和尚は方ノ橋梅ヶ谷の萬松山医光寺八世の住職となり、村人から慕われたといふことである。寛政九年（一七九七）十一月二十五日亡くなられ、医光寺の墓碑には今も花が絶やされることがない。

このように井水や溜め池、道づくり等の事業に貢献した話は各所に残っている。原田の三浦重兵衛は原野川を治め村人を水害から護り、新田開拓を成しとげ御林（金谷宿と日坂宿との境）の杉本権蔵は小夜の中山の難所を避ける新道を伏見忠七協力のもとに日坂口より岩沢をのぼり

### 水路



水井川に沿って道を開き金谷宿に至るまでの道路をつくつた。竣工まで八ヶ月かかり、明治十三年五月三十日待望の新道が開通、有料ではあつたが交通の便が非常によくなつたため大変喜ばれたのである。

### 渡山得船和尚 墓碑





## 掛川藩学を興した 松崎 懋堂

松崎懋堂は明和八年に肥後国益城郡木倉村（現熊本県上益城郡御船町）に生まれた。父は忠法、母はげんといひ懋堂が八歳のとき村の祠官横田政成について大字を習った。他の少年とちがひ思い上った態度があり父は僧侶にしようとしたが喜ばず知人を頼り江戸に出た。十九歳より数年間昌平黌（学校）で学び、その後林述斎の塾で学んだ。

享和二年三十二歳のとき掛川城主太田資愛の招きに応じて藩校の教授となつて資順、資始の四代に仕えその信任を得た。

掛川藩学は懋堂が招聘される前に犬塚蘭園が開いた。懋堂の建策により邸内に学館を設け学則を作り教訓書を公布し北門書院で開講した。その中で「学問は物事の道理を弁へ、君臣父子長幼朋友の間に行い、身を修め家國を治むる事を習うことにして上下日用の急務なり」と述べ、家康が文を右に武を左とした遺訓を引いて「我家遠祖道灌公文武兼備の持たる事当世は申すに及ばず、今の世の女童に至る迄誰知らざる者無き程なる故に」といつた。当時家中に文武兼備の者が多かったが「近代打ち続き公用に暇あざる故に御教訓池もあれば次第に心掛けざる様に成り学問は書物読師の爲の事、太平の世なれば武芸も入らざる事也、唯形のみ覚得れば怠り等言輩もあり」と嘆き、「先祖の忠勲に報ひ平常学問武芸に出精し、道理をわきまえて、忠勤すべきように述べ、因て追々学問所も相応に造営し其方の器量を養育すべし、今先ず仮に稽古所申付候」として朱子の白鹿洞書院掲示を翻刻して、跋文は藩主資順自ら筆を執つた。文化二年資順は「城中賓館にて松崎懋堂に毎月七日の日に教授、園井五兵

衛に毎月二の日に講釈を命じ下土以上の聴聞、卒は蔭にて聴聞すべし」と令し、翌三年懋堂に命じて学問上のことを司らせた。

文化二年資愛、五年資順、七年資言の逝去と太田家に不幸が続き、資始が嗣いだころは学問も振わなかつたが壮年に及び盛んになった。天保十二年に学館を新築し翌年学館の傍に演武場、砲術演場を設けた。弘化元年名称を懋堂が詩経により「徳造書院」と改め、資始が隷書で書いた額を掲げて儒学を興隆させ、この年算学所も開かれた。また万延元年には学館と演武場と周辺を教養館と名付けた。掛川藩の江戸邸にも藩校があり、上藩邸（上屋敷）には拭目館、駒入邸には曙戒堂があった。懋堂も文化九年に掛川より江戸に移つて藩校教授を勤めた。

懋堂が掛川に居た文化八年幕府が小笠原忠徳、脇坂安直を朝鮮通信使との会見のため対島へ派遣したとき儒官林大学頭述斎に随行した。懋堂の門人中村葛嶺、海野豫介、戸塚泰輔らも従つた。文化十二年致仕し、文政五年目黒にある羽沢の石経文庫（木倉山房）に隠棲して門人の指導と諸侯への講義と学究に當つた。天保十年の豪社の獄に投ぜられた門弟の田原藩家老渡辺華山の赦免に奔走し、幕府に上書を提し無罪を述べた。華山が蘭学に興味をもつたのは文政十三年頃懋堂からケンベルの「日本誌」を借りたに始まる。天保十三年四月将軍のお日見を仰付られ、弘化元年九月蔵版を献上し銀子七枚を賜つた。学問は幅広く宋学を学び、积経新註を為したが晩年は古学に復した。また「開成石經」を復刻した。狩谷披斎、山梨桶川らと親交があり門人に塩谷宗隆、安井息軒、林鶴梁、山崎展園等、著書は「懋堂全集」「懋堂日曆」等がある。弘化元年四月二十一日、江戸で逝去。七十四歳。目黒の長泉院に葬られた。

## 石川 依平

伊達方村の農家惣兵衛重高の長子として、寛政三年（一七九一）正月元旦生まれる。幼名を亀吉、通稱を為藏といひ、初名は方教と呼んだ。家屋の近くに柳、楓などがあつたので、後に柳園又は楓が下と号した。

家は代々庄屋を務めていたので、その家系をあらわす『家能武可志談稿』に「第三代惣太夫は伊達方村寺ヶ谷の山崎弥左衛門の子にして、石川家に養子した」とある。五代惣太夫政成は才略あつて、能く農事に勉め富をなし、掛川藩主太田侯も度々立ち寄りられたと云う。今、元屋敷という地の建物は此の時に造られたものであり、始めて大庄屋を仰せ付けられている。六代惣太夫政隆は依平の祖父に當り、勤儉力行能く家を整えた。七代惣太夫重高は依平の父親であるが、依平は「吾家中は昔よりこの滑川のおほみだからとありしに、父よりおのれに至りて、そのわざにうとく貧しくありけるを云々」と記しているように父の代から家産傾き、天明九年（一七八九）に、大庄屋を辞退し、同時に本宅を取り崩して長屋住いとなつたのである。これは依平の生まれる二年前のことである。

方教（よひひら）と云う名は、慶雲寺の和尚がつけたものであるといひ、父親は生れつき、手先が器用で、葛のちり払いをこしらへたり、細工物を巧みにつくり、人々に賞讃されていたので、生活のたしにして糊口をつないでいた。このような生活の中で、神童と呼ばれ、伊達方小僧とはやされる。「石川依平」の名声が日々に高まつていったのである。

五歳にして「うれしいな門の柳に、手がとどく」というように、六歳にして「君が代の 松の千年を 神つきの ゆく末とおき 敷島のみち」と詠みて、事任八幡神社の奉納額に記されている。これが和歌の最初のものであるという。

寛政八年（一七九六）十月掛川城内に召されて、領主太田摂津守資順公の御前に、川千鳥・野冬月の二題を賜わり

川浪の音もさびしき夜もすがら 友呼び交し千鳥鳴くなり

風寒し野辺の千草は枯れはてて、霜にさえゆく冬の夜の月

を奉つて、面目をほどこし、色紙、短冊白枚とちとせ紙などを賜わると、柳園詠草に記されている。

この事を当時掛川の匂坂屋彦兵衛は次のように伝えている。「遠江国佐野郡山口荘伊達方郷士、石川惣太夫伴、為藏、寛政三亥年の出生にて、六歳になりける寅の九月、同所掛川連尺町うどん屋金八方へ父惣太夫同道して行ける時、あるじ金八かねて聞及たる事故、為藏に歌を望みけるに、折しも庭の菊盛りなりければ「秋ふかき庭のまがきに色そえて、咲きそむるらん露の白菊」と詠じけるを、人々聞き伝え、六歳の童子の詠歌なりとて、扇などにしるしめてあそびける。

掛川城内へ聴えて、その冬父惣太夫に恃為藏召つれて罷り出づべしと仰下されければ、即刻兩人共罷り出ける時、御城代太田外記殿、河野十郎左衛門殿、その外家老衆列坐して仔細御聞札の後、題を出されける 其題

霜夜月：山のはの梢あらはにおく霜の 影も消え行く冬の夜の月

浦千鳥：ゆきかえりしは鳴きつれて友千鳥 声もたかけ須磨の浦波

野 菊：空さむみ降りまさるらん白霜の つもりうつれる冬の夕ぐれ

夜千鳥：風さそう音ぞさみしき夕ぐれに 友よびつれて千鳥鳴くなり

右の四首を朗詠しければ即書写して、太田備中守資愛殿へ差上たるよし。その夜父に負われて帰る時、月の出るを見て、

玉はこの道の光をさしそへて霜に消へ行く冬の夜の月

右田舎には珍らしく候間写し御日にかけ申候」とある。

寛政九年（一七九七）七歳当時、大和郡山崎松平中斐守保光公に、宇津山を詠じ、また有栖川姫宮が掛川にきた時に、御前に召されて、冬恋、寄勸祝の御題をいただき詠じている。

寛政十一年九歳の時、権大納言冷泉為章卿の門人となり、父に伴なわれて堀路二見の浦で、「白浪も岩にくだけて玉くしけ 二見の浦にはる風ぞ吹く」と詠じ、本居宣長が大変ほめたという。こうして伊達方小僧の名は江戸にまで伝わった。

文化五年に宣長の「玉籤」を読んで感銘し国学の道に志し栗田土満の門を訪ねるのである。翁は七十二歳で依平は十八歳である。翁は「心あらばたづねてもとへみわの山 すぎにし神の代々のふるごと」と書いて与えた。依平は即座に、「みわの山杉たつ門も見えわかぬ 霞の中のみちしるべせよ」と返歌したのである。こと返歌は栗田家に残されている。

依平が入門して四年目に土満は没している。その悲しみを「おこたり文」によつて知られている。

依平が土満を慕う歌に「おもい出であととう岡の八千種に むかしの秋をしのふけふ哉」この岡の尾花かもとのおもい草 おもいわすれぬむかしなりけり」などなど幾首かの歌が残されている。

土満と別れた依平は、白須賀の夏日葵齋をたより独学を続けていた。文化十年（一八一三）に本居春庭の門に入って、門人録に名前を連ねた。

文化十二年結婚、非常なる愛妻家であったという。

文化十四年に遠州地方の国学の祖、賀茂真淵の五十年忌祭の発起人となり、先輩等の中に列して大いに活躍し、学問の平民化、和歌の普遍化に功績を残している。そうして遠江国学の泉居靈社の建設に願主として参加して、天保五年（一八三四）二月に森寿治、関武雄、高林方朗、小栗広作、石川依平と記録されているように、東遠地区の国学の重鎮としての地位を確保したのである。

依平の門人指導のため使用された書名を見ると、○万葉新採百首正統編（岡部翁著）○国後編（八木美穂著）○古書序表（岡部翁抄出）○祝詞式 ○姓氏録 ○古事記 ○古語拾遺 ○神代紀纂牙

○六国史 ○律令格式等

この国学の発想により東遠の地に尊王愛國の精神が養われ後に遠州報國隊の活動が惹起されるのである。

「大君の御贄のまげと君がらも 神世よりこそ仕えきにけれ」  
「木がくれて住山里も魚がしの 恵みの露のからむはなし」  
「風雲もよりに仕うるすめらぎの しきます国ぞ大和の国は」

依平の門人は三百余と記されている。多年学事の勉強を貫せられ掛川侯より、終身三人口を賜う。安政六年（一八五九）九月四日、六十九歳でなくなる。

門人録（市内関係者）

寛源石衛門正照・竹内玄操春平・竹内そへ・竹内千代、兵藤壮右衛門延賢・兵藤兼次郎弘史・村松多平真広・村松典五郎以弘・大庭代助延春・うめ・きの・竹内くに・内藤軍平・まつ・松本弥惣右衛門門広安・大石清兵衛弘高・樺葉閣平清藤・高村六右衛門清敬・祖父江盛作清久・兵藤莊右衛門隆房・今駒新兵衛孝則・四宮仲右衛門晴樟・福島平作佳良・青木頼母長広・中野李左衛門重成・遠藤三左衛門忠寛・宮崎宗元貞貫・近藤官左衛門安章・太田主殿竹城・田村善右衛門政助・名波門吉保枝・和田平太夫貞久・森下為助信徳・河嶋字平治親芳・河野嘉右衛門通明・大竹元浩・つゆ・内藤庄左衛門・かつ・今駒新兵衛保義・鳥居周平政雄・榎本与治右衛門祐寛・金原初造景寛・鈴木九郎左衛門正芳・山崎庄次郎隆平・鈴木太郎左衛門景春・伊藤清左衛門豊隆・教玄院秀全・近藤常右衛門清足・朝比奈東一郎宅貞・朝比奈榮秀雄・朝比奈東母定朝・落合繁左衛門為政・落合与左衛門徳徳・田中乙松高久・成瀬浅右衛門春久・村松孫兵衛弘道・戸田善作・戸田元八郎長茂・加茂五郎右衛門照繁・加藤照久・西尾豊次郎貞平・山崎式郎久盛・山崎久磨・原田直種

## 掛川藩の豪快な庄屋たち

### 〈庄屋について〉

掛川藩の農村部に対する支配機構は、藩の地方（郡方）奉行の下に地方御用達として

十二人扶持 鈴木九郎左衛門（伊達方）

八人扶持 岡田佐平治（倉真）

三人扶持 加茂五郎左衛門（桑地）

等の三家の大庄屋が藩と領内の農村との仲介役を務め、領主よりの布令を伝達し民意を上申する役目を果たした。

農村における下部機構と農民の末端までの組織は、各村に村方三役と称する村役人があり、これが庄屋（名主）・組頭・百姓代で、これを大前と呼び村役人の支配下に耕地をもつ本百姓（小前）と、耕地をもたない水呑百姓の三つの階層からなっていた。

庄屋（名主）は一村の長として各村の一人、或は大きな村では幾組かに分かれ数人の庄屋のある場合もあった。

例えば上西郷の場合寛永十九年（一六四二）まで粕谷善左衛門一人であったが、翌年より四組に分かれ粕谷善左衛門、岩清水惣左衛門、佐藤真左衛門、石川三左衛門の四人が庄屋となった。

庄屋は村内で単分けの旧家、大高持の名門により世襲或いは二・三の旧家によって交替で勤め、庄屋の任免は官選であった。

庄屋の仕事は、政令の伝達、年貢米の収納の世話、検見の立ち合い、人別、宗門改等戸籍上の事務、公事訴訟、民事調停処理公費の徴収、祭礼、消防、水利、土木等村内重要事務はすべて取り扱った。村内における床屋の権限は非常に強く、その下知

命令を尊重し、これに背くことは許されなかった。

領内における数ヶ村または数十ヶ村を合わせて大庄屋が置かれ、村々の庄屋を総括した。

### 〈減免直訴した河井弥八郎重高〉

河井弥八郎は名主庄屋を務める富農家であった。

安政の初め頃（一八五〇年頃）、厳しい干ばつで非常な凶作となり、百姓は窮乏にあえぐ時代が続いた。それにもかかわらず毛見の役人は百姓の難儀を教おうともしなかった。

上張や杉谷、結縁寺、長谷など南西郷の百姓に課せられる年貢も上田一石五斗、中田一石三斗、下田一石一斗、上畑一石三斗、中畑一石一斗、下畑九斗、屋敷一石三斗の割合（一反につき）で上納するのであった。上納米については掛川藩の財政の困難も手伝ってたいへん厳しいものであった。

これに対抗する掛川藩四十数ヶ村の庄屋は会合を開き協議するが、相談はまともならず憂色は募るばかりであった。万策尽きたけれどもなんとかしなければならぬと立ちあがったのが上張村の庄屋であった弥八郎重高であった。その親類になる初馬村の樵業作平を誘って最後の手段を行うことになったのである。

再び生きて帰らぬ決心をもって後の始末をし、ある時夜更けを待って暗夜にまぎれて弥八郎と作平の二人は武士の服装をよそおい、御用提灯を掲げて「緊急出仕、国家老太田織部様へ通る者である。早く門を開かせよ」と言葉巧みに打ち通って城内に入り直訴したのである。城内は「曲者ちん入」とばかり上を下への大騒ぎとなり、非常召集をかけての捕り物であった。二人は直ちに召し捕われて監禁されてしまった。一家一族にはそ

れぞれ手がまわり、妻も上張の宅で捕えられ乳飲み子を抱えて唐丸籠に容れられ城内に運送されてしまった。今日は討ち首か、明日は仕置か」と覚悟を決めてその日の来るのを待ったのであるが、全く突然に無罪放免となり帰郷を許されたのである。

幸にも諸事穏便に取り扱われ、更に毛見の役人も立ち年貢も軽減されて、村民こぞって安心したのである。人々は佐倉の義挙にも似たことだとうわさし合った。事がすんだ後、先の毛見の役人及び当夜の門番は御役御免になったという。

当時の駿河の地区は、何時一揆が起ころうともよいような緊迫した状況のものであった。

後に、米鑑が下田に来航した時、幕府は各藩に警備のための用兵を促して来た。掛川藩も農民を呼び出し、人夫隊を組織し使役人として活用した。

弥八郎重高は、その才能を認められその宰領を命じられて下田を往復したのである。上張村の庄屋弥ハツアマの名は藩中に知れ渡ったことである。

### 〔殿様をやりこめた中山勘太郎〕

中山勘太郎は明和八年（一七七二）大和田村の庄屋の子として生まれた。代々勘太郎を襲名してきたようである。

大和田村は後ろに大山がそびえ、前に原野合川が流れている。早くから開けた土地で、一千年も前から開墾されている。だから山家なれども一度はおいで、大和よいとこ米どころ」と歌われている。

勘太郎は掛川城主太田侯の二三代に仕えた。身分の相違は

あっても俗にいう馬があつたので、常に親近感をもっていた。だから勘太郎の逸話や伝説は数多く残っている。

ある時、殿様が勘太郎に

「何か所望するものはないか」と尋ねられたので

「何も欲しいものはありませんが、山家は寒くてなりません。

特に頭が寒くて……。」と答

えたので

「それでは、頭布を冠ったら

よいだろう。」と殿様から赤頭

布を賜った。

その後はいつもこの頭布を

冠って、殿様の前でもめつた

に取り外すことはなかつたとい

う。

殿様の行列がお通りになつ

た折に、勘太郎は頭布を冠つ

たままいたので殿様も困つて

「勘太郎頭布は取れぬか。」と

仰せられた。すると、

「取れば取れます。」といった。それから、勘太郎の頭布は自由自在だという言葉が始まったという。

またある年の暮に、村人達を引き連れて年貢米を馬に積んで勘太郎は火縄銃に火を点じて御殿の門内に入ろうとしたので門番は大変驚いた。常には武器等はむろん、ほっかぶり頭布さえ禁じているのに、火縄銃に火を点じて門内入るとは不届きなりと戒めたところ、勘太郎は何物より大事な御年貢米だから間違



大和田にある中山勘太郎家の長屋門





棟葉作平氏

いあってはならぬ、殿様に相済まぬと心配して来た。途中であれこれ申す者は不届き者なり、成敗するからと火繩銃の筒口を門番に向けた。門番は驚き、しからば御自由にと遂にそのまま門内に入ったのである。鉄砲をかついで御殿に入ったのは勘太郎だけだったという。そして殿様は、我が領内での困り者は大和川の勘太郎と上張の河井弥八郎だともらしたという。

さて、勘太郎には男の子がなかったので娘に養子をもらって世襲させ、安政三年（一八五六）八月に病氣のため八十二歳でこの世を去った。現在の勘太郎の家は菊川町に移住し、元の屋敷には長屋門と離座敷が残るのみである。掛川藩主の太田侯は、猪狩りの時に勘太郎の家に泊られた。離座敷の廊下はうぐいす張りであったといわれている。

〈治山治水の棟葉作平〉

棟葉作平は天保一〇年（一八三九）八月一日、佐野郡初馬村の素封家棟葉惣右衛門の長男として生まれた。心が広大で情深かったので村民の信望が厚かった。安政五年（一八五八）十八

歳で初馬村の庄屋となり、以来四十余年村落に尽した功績は多く数えきれないほどである。特に村人達の信頼が厚く、事業を起こす度に人々は喜んで従ったので、



い池  
び谷  
の室

道路・水路・耕地整理等を企てて成らないものはなかったという。その成功から見ても徳望の高かったことが知られよう。

初馬村は最も水利に乏しく昔から村有用水池十六ヶ所、その他私有池があっても、なお旬日の旱天は堪えず、田畑は龜裂を生じ稲田は枯死してしまった。はなはだしい時は植付けすら出来ない状態で、農家経済はいよいよ窮乏した。

明治二十六年（一八九三）

は異常は早ばつに見舞われて稲は枯れ、町まで田の中を草履ばきで行ける程の日照りと飢えに苦しんだ。村長に泣きつく人も多く、田を耕すことも出来ずほとほと困ってしまった。作平村長は寝ても覚めてもその対策でいっばいであったが、ある日淡ヶ岳の頂上の阿波々神社に祈り、その山より流れる初馬川の清流が枯れないことに気づき、上流で堰止めて日本で最初のダムを作ることを考えた。この地は山間の溪流で池の敷地に適していたのである。その日から村の有力者を説得し始めた。みな村長の熱意で村中総出で初馬の上の溪谷にある宝谷にえん堤を作ることになった。

この工事は今と異なり機械もないので、モッコに土を入れこれを二人でかついで積み上げる人海作戦で一大難工事であった。また水面の漂水面もレベルがないので夜提灯の火で高さを出し

たりして苦勞した。工事は二ヶ年間もかかったが、明治二十七年（一八九四）三月めでたく完成し、村長はじめ村民は涙を流して喜んだ。初馬川の水は遠く淡ヶ岳より源を発しているのので、一雨降れば満水となる天然の溜池が完成した。今この池の弁財天を祀る岬に碑が建立されている。その碑文に提燈一万歩、水面三町歩溝渠七二〇〇尺、工事費四二〇〇圓、村民大歡呼と記されている。



#### 碑文

樺葉作平翁の英邁な頭脳と決断力は、この宝谷池と共に永久に語り伝えられる偉業である。初馬全域の田、およそ八十四町四反に灌漑できるようになった。それに伴って初馬地区は美田にかわり、米も前より倍増し獲れるようになった。村民の暮しが良くなったが樺葉作平翁はその農業収入を無駄使いしないように初馬報徳社をつくり、初代の社長になって村民に勤儉貯蓄を奨励した。

また、土地改良事業も進め初馬川の底を越す橋沢のサイフォンや懸樋なども作ったり、生産条件を向上させるための耕地整理なども行った。

郷土のために一生を尽した名村長として、その名は今なお語りつがれている。

なお、若い時のエピソードで村の庄屋として藩主に年貢の軽減を直訴して捕えられたが、庄屋としての職責も認められていたので死罪一刀を免れたという豪快な一面もあったということである。

## 書大家——成瀬大城

掛川に於ける入木道として書家といわれる人は、細井広沢・成瀬大城・成瀬西城・伊藤東海等々であるが、能書家として、鎌倉幕府の右筆となった「伏見冠者藤原広綱・掛川領内地誌見方の案内人を務めた大庭松風（岱助）、太田侯に仕えた古沢喜會・一庵父子・中村萬嶺・家老職の太田竹城である。書家は真草行の三本の外篆隸と唐様の字体を書く人を指したようで、真草行・仮名は幕府の右筆であり塾の師匠たちを能書家としたというが、一般的には書家である。

市井で名を獲している師匠として、広楽寺の釈慶福板園があり、広楽寺より養子にいった後藤南涯がおり、日坂では華表文左衛門・成瀬宗兵衛、掛川では兵藤庄右衛門・兵藤章吉・兵藤少作・山崎澄子・松村源太（葛扇堂）・海野健次（名は貞正・号積亭）、山田久七（名は覃・字は以長・号は鶴亭、吉岡では大場美知子等の名があげられる。

中でも四十二歳で江戸に出て名筆家と仰がれた、賜硯堂成瀬大城について述べてみよう。

大城は姓は成瀬、幼名を桂次郎といい、温（ゆたか）ともいう。文政十年（一八二七）正月、日坂に、成瀬家の九代目として誕生する。家は業屋である。

大城は始め医者になるため、掛川藩の医者本間春伯の門下生となつたが、志なかにして書法を研究して、桂齊と号し研鑽のかたわら商業に従事していたが、家産を蕩尽してしまい、家を弟の辰平に譲り、浅石衛門と改名して母方の三河屋久兵衛の後を嗣ぎ、あらたに久太郎と改名する。更に三河屋を長子の宗平に譲って四十二歳で江戸に出るのである。宗平は後に成瀬西城となり大城の後継者になる人である。

江戸に出た大城は、安井息軒の門下生として経学を修める傍ら、書法について研究を重ねて書家としての道を切り開いた。即ち八鑑法のごとき秘訣の見解は、大城の独創的な発想法により達成したもので、書法の根本義であった。

書は十体を悉くこれを知り、宛転滑脱、その技は神に入るといわれた。斯道千年の祖として自称していた善養湖でさえも、體目する程であった。このために書道における巨擘と称される程の腕前になった。

後年になり住居を下谷区金杉村根岸に移して、子弟の教育に専念したのである。

また、書法を見込まれて宮内省に職を置き、貴顕紳士のお屋敷に出入りして書道の教授にあたった。その門下であった仙石伯爵が、大城の臨する十体書帖を、明治天皇の読書される席の乙夜の覽に供したので、激賞されて、勅命により王右軍聖教の序を臨書し、併せて出師表を真草二幅にして献上した。

天皇から楠公手沢の古硯を賜わる栄誉を得たので、大城は感喜に堪えず、その光栄をその屋敷につけて「賜硯堂（しけんどう）」と称したという。

大城の書いた刊刻書帖は、次のようなお手本がある。十体一覽真書正真傳、軍人龜鑑、訂正三体千字文、和漢諸体一覽・筆陣八面鋒・展臨七仏聖教序・縮臨秋帖・その他仮名字教帖など。

門人で一家を成した人は、安藤藤州・小野鷲堂・塚本古殿・成瀬西城・清水某等で、その外に先生の門下生として記録された人数は数千人の多きに及んだといわれる。

また、社会事業にも積極的に仏恩奉謝の念が強く、窮民救済、神社仏閣の修理に私財を投げうっても己まなかつたと伝えられている。現在も日坂の法護寺境内に、明治三十年十二月に尊父の晩心翁の石碑があるが、その碑文は大山城主の成瀬正肥の選文で、書は大城の筆のあとである。



——維新の勤王義団「報国隊」を組織した——

## 山崎石見久景（八峰）

明治維新、鳥羽伏見の戦で幕軍が薩長勢の前に大敗を喫して將軍慶喜が江戸に帰り謹慎恭順すると、掛川城主太田資美は幕命により駿府警備にあたったが、征東軍の通行のため引き払い掛川に帰った。二月晦日大総督が掛川に泊り翌日藩主に急いで



山崎家長屋門（遊家）

上京するよう達しがあり、また藩へ応援の出兵を命じられたので一隊一〇〇余名を派兵した。

このとき別に遠州の神職を中心とした義団「報国隊」が従軍した。遠州は南北朝の頃宗良親王に従って五十年間勤王の実を示した土地で、江戸時代には杉浦頭領や賀茂真淵が国学を説き、精神を高揚し門下も多く、親王を祀る井伊谷神社を本拠として西遠の神職を中心に勤王思想が盛り上がりを見せた。

上垂木兩桜神社の神主山崎久影は文政三年（一八二〇）十二月五日生まれで天保七年平田篤胤の門人堀尾安房守に入門し、十一年には伊達方村の石川依平について和歌と皇学を学んだ。嘉永七年に神祇官領の吉田待従と部良照より許状を請い、兩桜神社の祠官社務を司った。

明治元年正月報国隊に参加し大総督府の進軍の応援をしたが、隊の会計等の都合により遠江国内に留って隊の指揮に当った。八月には隊の要務のため東京へ出張し折返し、京都に奔走し十月中に帰国した。それより掛川藩の役所が領内不穏のため暴動抑圧の説得を有加者に依頼したのに加わって各村を巡回し説諭につとめた。

石見の子一郎と豊之助も報国隊に加わった。長男一郎は弘化三年に生まれ文久二年十六歳で藩の家老太田方で学問を修め、元治元年十八歳で三河一宮神主草鹿砥近江守に皇国学を学び二十四歳で明治を迎えた。二男豊之助は嘉永二年に生まれ安政六年十歳で掛川藩学入門して武術を好み、二十二歳で明治を迎えた。明治元年三月有志と申し合わせて報国隊を組み、大総督府に従軍し江戸へ進軍、上野追討に加わり東北を平定して凱陣と共に十一月に帰国した。

掛川市内の村々より参加したのは十二人（全隊員三百六人）で大砲隊に属して東北に従軍したのは四人（同二十七人）出兵した者は外に三人（六十人）留守隊幹部一人（二人）留守隊員四人（二百八人）で兩桜神社の山崎石見を中心に一族と撰社、社家の人々が大半を占め他に日坂八幡宮の神官が加わった。全体では西遠地域の隊員が多い。

鳥羽伏見の戦の報に同志が結束して代表を上京させ従軍と資金の献上、留守隊として供奉の請願が許され報国隊が結成された。総督府の通過に吉田・浜松・掛川・駿府の陣所で従軍を歓迎し、三月二十一日許されて富士川の警備、江戸へ進軍、入城後の警備と上野山で参戦、六月三日戦没者の慰霊祭を行う。十月大総督の帰京に供奉し十一月十五日浜松で解散し帰郷したが、遠州は徳川氏の静岡藩となって隊員の身も危険となり一部は東京で招魂社後の靖国神社に奉仕し、官途につく者もあった。

一郎は二年十一月招魂社の社司となり、翌年兵部省、五年教部省、七年海軍省に出仕したが三十一歳で病没、豊之助も招魂社社司から五年には熊本鎮台を務めたが神風連の乱に従軍して戦死した。

石見もまた三年四月兵部省へ出仕したが病氣のため帰国し、九月に佐野城東山名の式内社取り調べを勤め、六年には浜松県の学区取締り、十年大区神事支局副長となり、二十七年七十五歳で没した。

《遠州報徳のおこり》



報徳神社

高永元年（一八四八）相模の安居院庄七が遠州に来て、

初めて報徳を説き勤儉推譲の道を教えた。当時の人々は大変貧しかったために、民情は軽薄だった。心ある人はそれを心配し、みな安居院庄七を招いてその道聞き報徳社を結成した。

安居院庄七はざっくりばらんな明るい性格で交際が円満だった。そして、人情のデリケートな事情をうまくつかみ、話し初めると熱弁をふるい話の鋒先の鋭さは、人々に深く感銘を与えたという。世の中の辛酸をなめつくした人らしくその変化とレパトリーの広さは、説話の硬軟自由自在の形で表現され聴く者を心酔させるに十分だったという。日頃のまわりを飾ることもなく、威風堂々と道を説き言々句々、心の奥底からはとばかり出て人々を心服させる素晴らしい力をもっていた。

《岡田佐平治と牛岡報徳社》

高永元年戊申正月、佐野郡倉真村の岡田佐平治も安居院庄七の報徳の教えにすっかり感服心酔して、人々に説いて牛岡報徳社を組織した。現在の倉真報徳社である。今日なお隆々たる発展をつづけ報徳金三億円、評価額数十億円の美林を保有し、永安の郷土を誇っている。

ここに入社する者は、必ずなわなない法を実施した。なわなない法とは、一戸毎に毎朝なわな一房か、わらじ・ぞうりのうち各自自由に選んで前日の晩製作したものを戸外に掲げておいた。それを、佐平治が寒暑晴雨に拘らず怠ることなく集めて廻った。これは、度外の財（生活費以外のはたらし出し）で寄付金として積み立て、社員の相互扶助の資金とした。この勤労奨励と相互扶助の方法は他村の人々の賛同するところとなり、近隣各村は、この方法の指導を佐平治に依頼した。明治に至るまで十四ヶ村以上の村々が佐平治の直接の指導で復興したという。

けれども残念ながら遠州地方は、まだ「二宮尊徳大先生」の直接の教伝を仰ぐ機会に恵まれず、いわゆる孫弟子の位置にあったので佐平治はじめ報徳の人々はこの点を何よりも寂しく遺憾に思っていた。

《平岩佐平の活躍》

佐平治の同志である平岩佐平（佐野郡成滝村―現・掛川市成滝）がたまたま上京して、尊徳が宇津家江戸屋敷に居ることを聞き、チャンス逸すべからずとばかり強引に宇津家を訪れ、ねばり続けてとうとう尊徳に引見され親しく遠州地方における報

徳の状況を尋ねられた。平岩は感激におののきながらくわしく現状を報告した。

これにより尊徳は、初めて遠州地方の報徳運動が尊徳の意に叶ったものであり、しかも極めて注目すべきものであることを知った。それで、一度指導者たちを招待対面して大いに賞揚し激励すると共に、今後のことを指導してやろうと考えたのである。

平岩は夢かとはかり喜んで雀躍して遠州に駆け戻り、この旨を佐平治に報告したのである。佐平治も大いに喜び、厚く平岩佐平の労をねぎらった。

この平岩の功績は、結果的にみて極めて重大であり報徳運動史上に特筆すべきものがあると考えられる。

佐平治の尊徳に対する敬仰欽慕の情はいよいよ募るばかりであった。この平岩の思いがけない報告に接し、佐平治はますます尊徳に傾倒したのである。そして一日も早く、一人でも多くの仲間を連れて日光に尊徳を訪ねたいと、直ちにその準備にかかったのである。

### （尊徳と佐平治）

佐平治は一人でも多くの仲間に尊徳の偉大さに触れさせ、直接道を授けてほしいと念願した。それで、嘉永六年（一八五三）八月十日、遠州三十余社の報徳連中四一九人の代表として（のちの「報徳七人衆」）近村の仲間である影森村の内田啓助・下石田村の神谷久太郎・気賀町の竹田兵衛門・松井藤太夫・森町の山中里助・中村常蔵、それに岡田佐平治を加えた七人で倉真村を出発した。途中、相州から安居院庄七の同行を求めて野州

（栃木県）の桜秀坊に尊徳を訪ねた。十一日間にわたり門人からの説話、尊徳から親しく細部についての指導を受けて帰り、熱心に報徳を唱導した。それから毎年一回、遠州各地で報徳大会を開くようになり勤儉推譲の道を講じた。報徳社の数は急激に増加していった。

そこで各社を統轄したり、連絡したりする機関の必要を感じるようになり、遠州国報徳本社を浜松に設立した。それは明治八年（一八七五）十一月十二日のことだった。佐平治が社長、伊藤七郎平・小野江善六・新村里三郎・名倉太郎馬・神谷喜源治らが幹事だった。

毎月十一日を会合の日とした。そこに集まる人は、常に数百名を下らなかつたという。翌年、佐平治は社長を辞任した。

佐平治の社長としての年数はわずかに一年にすぎなかつたが遠州各社の指導に全力を傾け、報徳社の基礎を築いた功績は大きい。佐平治の一生は、その号「無息軒至誠」のように至誠をもって貫き、生涯そのものが報徳の実践であった。

### （岡田良一郎）

佐平治社長辞任後は、長子岡田良一郎が社長に選ばれた。のち見付と掛川に分館が設けられた。

良一郎は遠江国報徳社長として社業の基礎を強化し、経営の刷新を図った。そして時代の進展に順応するように最善の努力を尽した。その抱負は名著「報徳富国論」に要約されている。その実現としては、次の数項を挙げべきであらう。

### （報徳富国論と報国斉家談）

一、民風作興トシテ

孝子義僕篤農家、精業善行者ノ旌表、賞与

二、人材養成トシテ

冀北学舎の設立運営

三、勲業奨励トシテ

農事の改良、農事講師養成、掛川農学者の組織、紡績業の経営等

四、金融助長トシテ

掛川信用組合の創設、銀行経営業務への従職等

五、社会改良トシテ

常会の教化、社会教育、地方自治の援助等

以上は、その最も顯著なものといふことができよう。

報徳社の経営については、佐平治時代から力を尽して献策に努めてきた。遠江国報徳社の新しい方策の多くは、良一郎の考え出したものであった。「報国富国論」の実踐化を期するために「報徳齊家談」に著したが、その中の

子は三代にして賢良を出し、家は三代にして万金を蓄ふべし

(報国齊家談)

の一語は、良一郎の信念ともいふべきもので、当時各地の講演でも、常にこのことを力説したという。

これは、当時のGNPが諸外国に比べれば著しく悪く、国民総貧乏の状態にあることに憤激していた。だから我が国日本が毎戸一円の分度外の財を所有するようになったらば、必ずや外国を追い越して世界の一等国に仲間入りできるといふ主張である。

従つて、明治十七年(一八八四)における善種積立規定の改正にあつては自分の考えを実現するために規定の中にこのことをはっきりと盛り込んで実行に移したのである。そこで世間の人々は、良一郎を「勲儉貯蓄」の唱導者であるかのように誤解してしまつた。

これに対して良一郎は

報徳ノ道ハ、勲儉貯蓄ニアラズシテ、勲儉推讓ニアリ、推讓ナキトコロ報徳ハナシ

と世評の誤りを是正することに努めた。

良一郎一代の業績は実に大きかつた。明治以後に結成された全国にある報徳社の大多数は、実に岡田淡山翁の力によるものである。こうして彼の晩年において、その監督下にあつた報徳社は実に七百余社にのぼつていた。

〈冀北学舎と岡田良一郎〉

冀北学舎は倉真にある岡田家の邸内にあつた私塾である。前述のように岡田家は旧家で、豪農名望家等の名にふさわしいこの地方屈指の名門である。この岡田家の本邸の裏北側に建てられてあつたのが冀北学舎である。

明治九年頃から岡田良一郎は人材養成の趣旨から漢学と英学とを教える私塾を開いて、数人の子弟を集めて自ら漢学と和算とを教えていた。その時ちょうど浜松の知人からその息子の孝之を預かることとなつた。この孝之は東京英語学校を卒業した青年で、英語の素質があつたのでその方面の教授を担当しても

らうのに好都合であった。これが冀北学舎を創立する動機となつたのである。(一本喜徳郎 回顧録)  
正式に冀北学舎として開校したのは静岡県大書官黒務の冀北学舎開校祝辞に明治十三年六月二十七日とあることから推定される。



岡田良一郎

冀北の二字はいうまでもなく「伯業過冀北之野而馬群遂空」の句で知られた中国の名馬の産地、冀北に囚んだものであるとされている。

良一郎は熱心な報徳信奉者であつたから、彼の一生涯は一貫して報徳の実践であつた。冀北学舎の教育の事業も同じ精神から出たものであつた。

生徒は遠く東京・茨城・鹿兒島・栃木・愛知等からも集まつた。明治十七年、閉校するまでの間に生徒数二百余名にも及んだという。

### 〈冀北学舎の学風と指導精神〉

子息岡田良平が、大日本報徳社の機関紙の報徳の紙上に次のように語っている。

「冀北学舎の教育の中心は淡山翁一人であつて、徹底的に翁の理想を実行したものである。校舎は邸内の一隅にあつて、母屋

とは全く別棟であつた。学生の数は当初は二十人から三十人であつたが追々に増加して、最も多い時には五十人から六十人である。そのほとんど全部が舎内に寄宿していた。

朝は四季を通じて四時に起床し、ランプを点じて読書をなし夜明を待つて数班に分かれて朝の作業に着手するのであつた。朝の作業は、校舎・母屋・庭内・門外の道路を掃除することであつて便所の清掃にまで及んだ。

大部分の学生は、相当に裕福な家庭に生立つ者だけに、それまで拭掃除に経験のない者すらあつた。従つて、便所の掃除番に当たつた者などは初めは随分難儀したものであつた。でも毎日の掃除で便所が極めて清潔であつたのと作業が極めて容易であつたため、後にはかえつて便所の掃除当番を喜ぶようになったのも笑止のことである。

朝の作業が終わると全員が母屋で朝食をとつた。学生の少ない間は、飯炊きや副食の調理は自分達で行つたが、学生が増加するにつれ混雑を避けるため、後には私の母が数人の下婢を率いて自ら賄方一切の仕事をしたのである。この間の母の繁忙さと苦心は実に容易なことではなかつた。

朝食がすむと全員座席に着き、その内五人、八人位が一組になつてかわるがわる先生の前に出て授業を受けた。その他の者は自分の席でもつて予習をしあるいは作詩・作文・報徳書の筆写・その他の規定に従つて種々の課業に従事したものである。

作詩・作文などはかなり勉強させられたもので、毎日『雑股雑草』という雑誌を発行して、一ヶ月間にできた詩文のうち優れたものを掲載した。作詩のように今日から見れば無益の業のように思われる。しかし、教育は決して実益のみを目的とするも

のではなく、風雅な心を養い人格の形成に役立つものは今日においても大切なことである。

学生の席はすべて先生の監視のもとにあって、学生は絶えず先生に質問し、また指導を受けることができた。その間にあって先生方のほうでは詩文の派削、種々の準備等があって、その苦勞はなかなか大変なことであった。午後の日課もまた午前と大体同じであったが、夕食後には淡山翁は一日の公務を終え学舎に臨んで親しく学生に接した。

日曜日には午前十時まで農業に従事することにきめてあり、淡山翁が自ら鎌・鍬をとって学生を引率したこともあった。しかし翁が差支えるときは、長年私の家に仕えて農事に精通した男が指導したこともある。

この農事教育は、技術の教育としては誠に不十分なものであったが、労働を嫌ったりする浅はかな精神を打破するには、少なからず効果があったと思う。農業が終った後は学生が最も自由になり、愉快な時になった。ある者は山登りをし、ある者は川遊びをし、あるいは撃剣をする者もあり、あるいは囲碁将棋等に熱中する者もあった。

淡山翁は、囲碁・将棋はもちろん、一切の勝負ごとは好まなかったが、学生には日曜日に限りこれを許した。

冀北学舎の学生は、金銭を所持することは許されなかった。学資は一切私の母が預り必要に応じてその都度これを渡し、いちいち記帳して置いた。年末学生が帰省する時には、精細に収支を計算して家庭に報告したのである。この仕事は、随分と煩雑で、かつ心配のことであつたらうと思う。

以上、良平先生の談話によって、冀北学舎の学風と指導精神

が如実に知ることができよう。

同学舎は、岡田良一郎淡山翁が私塾とし、その教育方針が農教一致の報徳精神をふまえた高等教育の実践の場であった。

校舎は今なお、その一部を報徳社に移築して現存している。この学舎の維持費は、全部岡田家の支出によるもので、同家は私財を投じていたといわれている。

冀北学舎は、明治十七年（一八八四）七月に閉校となった。それはこの年徴兵令が公布され、私塾に猶子の恩典が及ばなかった。それに中学校が発達普及して、塾の使命はほぼ終つたからである。

その事業としては、僅かに七年間に過ぎなかったが、この間淡山翁の偉大な精神と高潔な人格とに薰陶された学生の中には優れた多数の人材を次々と世に送り出したのである。

#### 〈大日本報徳社と岡田良平〉

良一郎の長男岡田良平は、東京大学卒業後文部省に勤務し、一生を文部行政に捧げ、日本の教育を支えた人である。

中央にあって活躍した良平が、郷土との関連で特に記録されなければならぬのは、父良一郎の後を継いで明治四十五年（一九一三）大日本報徳社々長として報徳運動の推進にあつたことである。中でも、御成婚記念事業として大正十三年（一九一四）小田原二宮神社の社前において、今まで全国に点在していた報徳社を統合して新しい全国の中心としての大日本報徳社を確立した。

かくして、明治十年以来の分脈はここに一本化されたのであつた。報徳の道は一円融合であると……………。



以上、報徳社に関係した人たちについて述べてきたが、徳川時代末期から明治にかけての報徳は時代をリードするものであり、その指導者なり実践者なりはつねに社会の最先端にあった。彼らは、政治・経済・社会・教育等あらゆる面での先進者として、時代の灯火をかげ率先して世に数々の実績を残したエリートたちといえよう。

参考文献

- 『報徳運動一〇〇年のあゆみ』（掛川市誌）
- 『郷土の華、掛川人物伝』（岡田良平先生小伝）
- 『郷土の開発に尽した人々』（第一・二章）



——掛川茶の普及に努めた——

## 小林源四郎 父子

お茶といえば静岡——というように、茶は静岡を代表する農産物であつて、その中心が藤原・小笠であることは東海道線の

車窓から眺められる風景がよく物語っている。



小林源四郎氏

こうした茶王国を築きあげるまでには多くの人々の長年の歳月をかけた研究と努力があつたからこそである。

掛川地方で茶づくり、製造、販売等に尽した人達の中で、まず上内田の小林源四郎、太三郎父子二代にわたる業績を見逃してはならない。明治五年、茶業の有利なことを考え皆に先んじて自分の山林を開墾し茶樹栽培に努力した。然し販売経路には問題があり、利益は少なかった。

明治十二、三年頃、数十名の同志と相談し横浜に直送したがこれも経費が乏しかったため、失敗に終ることが多かった。それ以後、研究に研究を重ね明治十六年製茶共同販売組合を組織設立し、その名を「益集社」と命名、製茶法の改善を図り組合員一致協力・品質の向上に努めた結果、需用者の信用を得ると同時に販売の手段を省いて費用を軽減し、生産者の利益を増やし

益々事業も拡大し協同組合の発達には必ず「遠州の益集社」の名が出る様になった。

初代組合長には小林太三郎氏が就任、日清戦争後お茶の貿易が盛んになると横浜の茶商大谷嘉兵衛氏と取引し、翌二十九年には磐田小笠両部の協同販売組合を連合し協力して製茶の品質の改善を図り、生産したお茶は大谷商會に直送し品質の良さも知られ良い物は直接外人に売脚したりしたので大いに外人の信用をうけた。

以後、ひたすら品質の向上改善に尽し現在の小笠掛川の茶業の発展に尽した功績は誠に大きいものがある。

この外にも小笠掛川の茶製造技術の向上発展に貢献し、名声を高らかしめた人物がいる。

萩原都太郎氏がその一人で、氏は粟ヶ岳の麓、東山に生まれ、二町歩の自園自製の茶農家である。より経済性を高めるため構造改善を図り、富士東製茶工場をつくり自ら委員長となり製法技術の研究を重ね苦辛の末、深蒸茶の製法技術を生み出した。昭和五十二・五の両年にわたっては、日本一の榮譽を受けたのである。この製法が他生産者に広まり掛川茶の名声を高らかしめたのである。

掛川の水道事業に貢献した  
鈴木理一郎

水は地中で脈絡に沿って血管のように脈うっているので、水を得るために数ヶ所を調査したが、掛川町ではどこを探しても水



鈴木理一郎氏

は少なく、数十日も雨がなければ婦女達は水に苦しむことが少なくなかつた。また一度河川が氾濫するよう

なことがあれば水は濁って清水が得られない。また火災に遇えば何軒延焼するか図り知れない。この苦難を除くために上水道を設置するより外はないと、たびたび唱えられたが実行されなかつた。

大正七年の町議会で是非とも水道を敷設したいと、某氏に水道調査を依頼したところ、十九首で試験し豊富な地下水を発見し、この水が良質なことが認められ早速敷設の設計に取りかかり、県からも賛意を表わされ吏員も派遣され資産の点の配慮もあった。こうして毎夜のように委員会を重ねて同九年四月起工し、翌

十年六月に竣工した。以来千鶴があつても水に窮することもなくなり、その恩恵が忘れられようとしていたのでこの配水池の畔に碑を立てて、掛川町の水道建設の由来を後の記念のために

記しておく。当時掛川町長だった鈴木理一郎氏は大正十四年四月掛川公園に碑文を記された。

鈴木理一郎は明治二十年十一月十七日伊達方の素封家鈴木九一郎の長男として生まれた。鈴木家は近世掛川藩の大庄屋で御用達を勤めた名門であつた。十二歳のとき小学校を卒業すると両親は、「他人のメシを食わせて敵しく育てる必要」と考へて静岡の浦野鋭翁の漢学塾「三益堂」に入り静岡師範付属高等学校、静岡中学に通い、塾では礼儀作法と漢文や英語を学んだ。静岡より第五高等学校に進み京都帝国大学法科大学政治経済科を大正七年に卒業すると実業界に入り、横浜の関東製鉄株式会社の常務取締役となつたが翌年十二月父親が死去したため郷土に帰郷した。大正十一年掛川信用組合理事、掛川商事株式会社監査役、掛川銀行監査役等に就任し、翌十二年掛川町長になると信用組合以外の役員は辞退した。当時掛川町長は交替がはげしく郡長が代行したり任期の満了まで勤める人は少なかつたが、以来昭和の戦前、戦中の苦難の時期を通して昭和二十一年敗戦による公職追放まで二十二年間にわたり町長の職にあり、二十七年再び町長に当選、二十九年町村合併により市制が施かれ初代掛川市長になり二十八年間住民の信頼をうけ、市の発展に活躍した。

この間大正昭和初年に逆川、垂木川、原之谷川の河川改修、市街と道路の整備改良、国鉄二俣線の積極的な誘置は十五年に全通を見た。戦争中は軍人にへつらうことなく主張することは主張し、学童疎開の受入で東京都から感謝状を受けた。戦後中学校の新設や小学校の改築、火葬場の設置、町村合併と市制に伴い市庁舎を建設し、三十三年には総合病院の建設に着手した。自然の流れに逆らわず無理をしないが好機をとらえて逃さない、

ふりかかった火の粉は払わなくてはならない、実行力と部下に對する信頼、でしゃばることがなく眉毛のような人になりたいと自負し、市政はシンの通ったものであるようにと掛川市の表札の市の字は点と縦棒が一本に書かれている。

地方の經濟の發展に貢獻され大正十一年からこの世を去る昭和五十六年まで掛川信用金庫役員として在籍し、昭和二十一年から五十五年まで理事長であった。昭和初年に町長として商工会を開設し相談役、二十八年會議所に昇格すると常議員、監事、顧問として市の商工業の發展に尽力した。

鈴木氏の市政とともに發展した掛川の水道事業は、大正十年創設され、當時計画給水人口は一万人で給水能力は一、一六九立方米だった。大正十四年に大池村と合併して拡張工事を行い昭和四年に竣工した。更に昭和二十五年に施設の拡張、また町村合併による需要の増加によって、三十一年から五ヶ年の継続事業によって日量二、一〇〇立方米に給水能力を増加させた。以来増設、拡張を重ね、今日では給水人口五九、五〇一人、年間總配水量八、三九六、〇九八立方米、一日平均配水量一七、六五九立方米（五十八年末現在）に達している。

——教育界に貢献した人たち——

## 飯塚仙太郎

教育界で大きな業績をあげられた方は、数多くあるがこの稿では教育の発展に尽した飯塚仙太郎、女子教育に信念を貫き通した鬼頭うた、そして地方教育に尽した至誠の人井上磯三郎を取りあげた。

初めに飯塚仙太郎について述べてみたい。明治三十一年（一八九八）三月二日郷土の先覚者飯塚仙太郎、松井豊吉、平尾平十、杉山東太郎らによって、東海地方で初めて掛川に公認の私立東海訓盲院が創立された。これは全国で八番目の学校であった。それ以来県立移管になって静岡市に移るまでの一九ヶ年盲人教育が続けられた。まさに掛川は静岡県立盲啞学校の発祥の地といえよう。

創立者飯塚仙太郎は獣医であり、また掛川叢文堂という新聞販売店取次店を経営し町会議員もした有力者だった。

松井豊吉は飯塚仙太郎と県立中学校の同窓生で、東京に出て勉強中に失明してしまいい時東京盲学校に入学を試みたが年令超過のために志を果たさず、郷里掛川に戻った。その時、兩人が話し合っているうちに盲人教育のための学校を始める決意をした。創立の前年の明治三十年（一八九七）五月のことであった。

飯塚仙太郎は六月、県内の各新聞紙上に盲人教育の必要性を説いた概文を連載して同志を募った。これに呼応して杉山東太郎（県会議員）平尾平十（大池村長）、宮本新藏（松井豊吉の友人）が協力し、郷土の有力者が後援会を作って尽力した。最初の学校の

位置は、掛川町五五六番地（紺屋町広栄寺）で寄宿舎を西南郷村南西郷七一番地（現・神代地）に一戸借りて発足した。

教育の内容は、自立の精神を発揚し自立の道を得させるための音楽・鍼技術（はりとおんま）の技芸教育を中心に修身・国語・算術・講読・体操の教科を設けた。尋常科三年、その上に技芸科三年制があったが技芸科まで進むものは少なかった。当時の授業料は月三〇銭で寄宿料は四円と定められていた。

校舎は初め広栄寺の一室から三十三年十一月、掛川番外五〇八の平屋建三〇坪の教室に移った。三十三年一月四日の掛川町の大火災にあつて街の大半が焼失し警察署も焼けた。

訓盲院は類焼を免れたが、警察署の飯庁舎となって返却の見通しがつかなかったため三十四年一月に神代地の寄宿舎に移りその際教室の一室を増築した。

それから後、大正四年（一九一五）県立移管に伴なつて静岡市に移るまでの十九年間、掛川の訓盲教育は続いた。

この障害児教育の発祥は障害者に対する理解を一層深め、適切な職業訓練とそれに伴なう技法の向上を目指した。そして障害者が明るくしかも進んで活動できる場を心掛けた事業で、一人ひとりの能力を最大限に引き出し社会自立の道を開いたものといえよう。

## 鬼頭うた

次に、女子教育に信念を貫き通し偉大な功績を残した鬼頭うたについて。

鬼頭うたは明治十年（一八七七）十二月三日、現在の栗田油

店に出生する。掛川尋常高等小学校卒業後、東京の渡辺裁縫女学校に学び優秀な成績で卒業され、郷里に帰り掛川女子裁縫義塾（現・円満寺鬼頭良武氏宅）の校長である鬼頭良寅氏と結婚し鬼頭うたと改姓した。

うた女史は校長である鬼頭すま女史によく仕え、稀にみる模範的な嫁と姑との関係であり、どの教え子からも当時のほほえましいエピソードのいくつかが聞かれるのである。



うた女史の発達に尽した  
女子教育の  
鬼頭うた

明治三十六年（一九〇三）四月、各種学校の認可を得て掛川女子裁縫義塾となり後、掛川高等裁縫女学校となる。当時は担任として最も得意な課程を受持ち献身的に教授し、特

に婦人の生命である家事・躰け作法に最も重きを傾注したのである。それにその他の学科（修身・国語・算術・代教・英語・割烹等）にも心血を注ぎ、女子教育に信念を貫き通し、偉大な功績を残した。

うた女史の性格は温和で忍耐強く、芯が強く包容力に富み常に謙虚であった。また、心あたかく人に接し生徒からはあたかも慈母のように慕われ、その徳行は婦人の鏡であったといわれている。

当時の駿遠報知新聞（昭和三年十一月十五日付）には、次の

ようにうた女史を讀んで掲載している。

「鬼頭良寅夫人うた女史は、性格温和、高潔なる人格で、女子教育に最も適切なる事と一般の定評を博し、生徒からは慈母の如く仰がれている。常に校長のすま女史の指導を仰ぎ、その徳行は婦人の鑑（鏡）とするに足る。善良なる生徒を社会に送り、家族的婦人の養成に努力せる精神は、一般より最も好感をもつて迎えられている。」と記されている。うた女史の教育的実践が如何に素晴らしいものであったかが伺えるのである。

昭和九年（一九三四）、掛川高等裁縫女学校と校名を改め、更に掛川高等実践女学校となった。校長鬼頭うた女史は校長としての手腕を存分に発揮され、多くのすぐれた教え子を育て女子教育に一生を貫き通し偉大なる功績を残したのである。

昭和二十年（一九四五）、終戦時多数の教え子たちにお生まれて他界された。その時の弔辞は教え子を代表して元市会議員石田りよ女史によってなされたそうである。

## 井上磯三郎

最後に地方教育に尽した至誠の人、井上磯三郎について……井上磯三郎は、明治二十二年（一八八九）八月十五日に初馬の井上定吉の長男として生まれ、掛川中学校二年より円満寺に学び、明治四十二年（一九〇九）四月に県立師範学校本科を卒業する。駿東部の教員を振り出しに、小笠原下の各小学校校長を歴任、小学教育会長に選ばれ地方教育に貢献した。

昭和六年（一九三一）、永年の教員生活に終止符を打ち退職後

郷里に帰り、悠々白遑の生活を夢見たが村民の信望を集め昭和十五年（一九四〇）粟本警防団長、昭和十七年粟本村村会議員、同年七月に村長に就任後四ヶ年になる戦時下の村民の生活を守り重責を全うした。敗戦による混乱期の村政を正して、昭和二十一年（一九四六）十一月、自治功勞者として表彰される。退任後も初馬報徳社社長、粟本村村会議員、大日本報徳社参事等の役員を歴任する。

昭和三十六年、老人福祉の向上は老人クラブの結成にありと老人達によびかけ、全国に先駆けて老人クラブを結成し老人クラブ会長、掛川市老人クラブ会長となる。



地方教育の発達に尽した  
井上巖三郎氏

特に、老人の生きがいの意欲づくりと老人の市政参画に大いに役立った。昭和四十年（一九六五）十月、中山市長就任に伴ない、市政の相談役として力を尽した。また公職を去ってからも掛川市誌編纂の役を務め現在の一、四六五ページに及ぶ市誌完成の功績は大きい。

このように公務に忙しい巖三郎も家長としてはなかなか厳格で次のことに関しては家族にきちんと守らせた。

- 一、時間を守れ
- 二、物を大切にせよ
- 三、戸を開け放しにするな

- 四、みだりに寝ころぶな
- 五、食事の時にはきちんと坐せ
- 六、使った物はすぐにその手で片付けよ
- 七、男女共必要以上の長髪はよくない
- 八、言葉ははっきり話せ
- 九、仕事は自分の力で出来ることを引受けよ
- 一〇、家庭内は朗らかに暮せ

家にあつては昔氣質の厳しい人であつたが、死ぬ直前に家族全員に対して次の事を言つて永眠した。

「わがままなおじいさんで悪かつた。こうして長生き出来たのもみんなのお蔭だ。ありがとうよ。」

昭和五十五年（一九八〇）一月、九十一歳の生涯を終るまで市誌資料の作成及び郷土の歴史研究に没入し、種々の貴重な資料を残し明治百年には粟本小学校児童重全員に「明治百年今昔物語」を配つた。



——郷土の発展につくした人——

## 松浦五兵衛

松浦五兵衛は、郷土の生んだ大政治家である。氏が組合長を努めた小笠原列館(現・文化センター)、大ホール)前庭に顕彰碑が建てられている。

硬文には「松浦翁は資性英邁、識見高遠にして機智縦横、剛毅の氣宇嘗て一度も膝を権門に屈せず。烟を俗家に売らず、勇敢の意氣所信に直進して百難を恐れず。翁の生涯の心血は国家公共の為に傾注せられ、一毫だも私利私益を図るの暇なかりき云々」とある。

五兵衛は、明治三年九月十五日、小笠原河城村沢水加の素封家栗田文次郎の次男として生まれ、幼名を清作といつた。長じて西郷村五明の松浦家の養子として迎えられた。この松浦家は江戸時代より五明村の庄屋を務め明治になってからも村長として地域の発展に尽されてきた名家である。五兵衛という名は松浦家の人となつてから襲名した名である。

若かつたが推されて明治二十九年郡会議員を務め明治三十二年県会議員に初当選、県政の場に手腕を発揮し早くも同三十五年には衆議院議員となつた。以来、代議士に当選すること九回に及び大正十四年には選ばれて衆議院副議長長の要職につく。議員の職にあること三十年中央政界の重鎮として国政の推進に当つてきたのである。

この間地方産業の振興に対しても努力を傾注している。即ち県農業会々長、県茶業組合会議所会頭など各種地方産業団体の

要職にあつてその振興と発展のために努力すると共に、海外視察を行つて市場拡大などの改善に貢献したのである。

市内でも「真つ直ぐな道」として知られている西郷県道は、掛川と川根を結ぶ林業振興道路としてつくられたのであるが山村地域の開発と生活の向上にも大変役立ったことは言うまでもない。又、長年静岡新報の社長として経営に当り地域文化の発展向上に寄与している。

こうした氏の功績に対し大正四年勲四等、瑞宝章、更に大正八年には旭日小授章が授与された。

昭和六年三月十二日他界した。氏の葬儀に際しては多くの人々がその死を悼み参列の人波が西郷県道を埋めつくし、一日中行列が続いたといわれている。



松浦五兵衛(中央)

掛川で中央政界に活躍した人は、松浦五兵衛氏のみでなく倉真の岡田良平、一木喜徳郎兄弟、上張の河井弥八、仁藤町の戸塚九一郎の諸氏があり、ここでは名前のみ記しておくこととする。

掛川の人物誌

印刷 昭和六十年三月

発行 昭和六十年三月

編集 掛川市教育委員会

社会教育課

発行所 掛川市教育委員会

印刷所 掛川市宮脇 錦彩光堂





文化財愛護シンボルマーク